

## 「大目乾連冥間救母變文」 訳注（一）

小松謙・井口千雪・大賀晶子・香月玲子・川上萌実・孫琳淨・  
玉置奈保子・田村彩子・藤田優子・宮本陽佳

本訳注は、「大目乾連冥間救母變文」について、目にするのできるテキストの全文をあげて異同の全体像を示すとともに、注釈と訳を施したものである。原文については、抄写が行われた当時における用字意識を探るため、本文校訂は行わず、明らかな誤字・略字や修正の跡も含めて、可能な限り原文のまま再現することを目指した。踊り字や周辺に書き込まれた記号も、できる限り原型に近い形で示すことにした。

最も完備したテキストであるS2614を底本とし、他のテキストを並列する形を取る。訳文については、複数の解釈が成り立ちうる場合については仮に一つの訳を附し、注でさまざまな可能性について論じる形を取っている。

本訳注は、京都府立大学において開催している敦煌變文研究会の成果である。今回の訳注作成担当者は、それぞれの担当箇所後に名前を附している通りであるが、本成果は無論、今回の訳注作成担当者以外のメンバーらを含めた研究会における議論の上に成り立つものであり、また彼らは原稿の確認・修正等の作業に従事しているので、全員を共著者とする。

分量が多いため今回は全体の三分の一程度に留まっているが、これに続く部分については、まず本年度中に『和漢語文研究』第16号に掲載の予定である。残りについては、来年度の本誌掲載を目指している。

### 【使用テキスト】

今回訳注を作成した部分については、次のテキストを使用した。なお、黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』と対照する際の便宜を考慮して、以下本文をあげる際にはテキスト番号と同書における略号を併記する。（ ）内に記すのが当該の略号である。

S2614（原）  
P2319（甲）  
P3485（乙）  
P3107（丙）  
P4988（丁）  
杏雨羽019V

なお、杏雨羽019Vは『敦煌變文校注』では参照されていない。

※北京8444も目連救母故事を題材とする変文であるが、文章が全面

的に異なるため、本訳注では取り扱わない。

【凡例】

- ・字体は可能な限り原文に従った。
- ・□は欠字。紙が破れているために欠字になったと思われる部分など。
- ・■は判読不能の文字。
- ・×は、他のテキストに存在する本文が、あるテキストにはないことを示す。
- ・はつきり見えないがおそらくその文字であろうと思われる場合には、字の回りに□を附す。例・田は、字の回りに□を附す。例・田
- ・単に字形が似ていることによる誤字と思われる場合は「ママ」記号を附して、注はつけない。
- ・小字は字の周辺（右上・右横・右下）に書き込まれている字である。
- ・小字の「乙」は倒置を示す記号と思われる（日本漢文におけるレ点）。原本では「レ」に見える例も多いが、「乙」に統一する。
- ・字の右横に記される「ト」は誤字を示す記号と思われる（日本におけるみせげち）。
- ・台詞と思われる箇所には「」を入れる。
- ・韻文部分は全文二字下げとする。
- ・注の引用文献については、できるだけ近年の校訂を経た刊行物で確認し、初出時に書誌情報を記している。書誌情報を記していないものは、仏典については『大正新脩大藏経』、その他は『文淵閣四庫全書』によっている。

・参照した活字本・校注・辞書類は以下の通りである。

黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』（中華書局 一九九七年）…『校注』と略称

王重民ほか編『敦煌變文集』（人民文学出版社 一九八四年）…『敦煌變文集』と呼称

項楚「大目乾連冥間救母變文」補校」（『四川大學學報叢刊』第

二七輯『古籍整理研究』、一九八五年。のち項楚『敦煌語言文學

論集』（上海古籍出版社 二〇一一年）所収…『項楚校』と略称

蔣禮鴻『敦煌變文字義通釋』（中華書局 一九五九年、上海古籍出

版社 一九八一年（増訂本）…『蔣禮鴻』と略称

中村元『広説佛敎語大辞典』（東京書籍 二〇〇一年）…『広説』

と略称

・その他、主として以下の辞典類を参照した。

古田紹欽・金岡秀友・鎌田茂雄・藤井正雄『佛敎大事典』（小学館

一九八八年）

石田瑞磨『例文仏敎語大辞典』（小学館 一九九七年）

中村元ほか編『岩波 仏敎辞典 第二版』（岩波書店 二〇〇二年）

望月信亨編『望月佛敎大辞典』（世界聖典刊行協会 一九五四年）

織田得能編『織田佛敎大辞典』（大蔵出版 一九五四年）

江藍生・曹廣順編『唐五代語言詞典』（上海教育出版社 一九九七年）

①

S.2614(原)：大目乾連冥間救母變文<sup>(1)</sup> 并圖一卷<sup>(2)</sup> 并序

P.2319(甲)：大目乾連冥間救母變文一卷 其偈子、每抄三兩句、後云、是<sup>(3)</sup>

P.3485(乙)：目連變文

P.3107(丙)：大目乾連冥間救母變文一卷 并序

【注】

(一)大目乾連冥間救母變文：目連は梵語 Maudgalyāyana の音写。目健連・大目健連 (Mahāmaudgalyāyana) と呼ぶ(健の字には同音の乾も当てられる)。仏十大弟子の一人。マガダ国の首都王舎城の北方のコーリタに生まれる。本名は村名と同じコーリタという。釈尊に帰依する前にはサンジャヤという懷疑論者の弟子であった。後に釈尊の弟子馬勝比丘の勧めで釈尊の弟子となる。ウツパラヴァンナー比丘尼と並んで目連は弟子の中で神通第一(禪定などを修めること)によって獲得可能とされる超人的能力に優れる)といわれた。釈尊の説法を邪魔する神龍を降伏したとか、釈迦国を滅ぼそうとする軍隊を撃退しようとしたとかなど、神通力によって釈尊の身辺の護衛を行ったことが文献に記述されている。強引な伝道活動もしたようで、神通を行使してうらみを買ひ、ジャイナ教徒などから迫害を受けたという。提婆達多の弟子たちによって暗殺されようとしたこともあった。目連が地獄で苦しむ母を救い出す説話は、以下の仏典に見られる。①『佛説報

恩奉瓮經』(『大正新脩大藏經』一六冊所収)、②『佛説盂蘭盆經』(『大正新脩大藏經』一六冊所収。唐の道世撰『法苑珠林』では「小盆報恩經」と表記。隋の費長房撰『歷代三寶紀』と唐の道宣撰『大唐内典録』では西晋の竺法護訳とする)、③『佛説浄土五願盆經』(P.2189。『法苑珠林』では「大盆浄土經」と表記)。いずれも中国で成立した偽経ではないかと疑われている。これらの經典と変文は内容・語句・構成ともほぼ一致するが、經典を基に変文が作られたのか、經典の成立以前に既に民間で変文のような講唱藝能が行われていたのか、前後関係は不明。

(1)并圖一卷：S.2614(原)にはこの語があることから、図を示しながら故事を語る絵解きのような形式で講唱されていたことがわかる。但し図は現存しない。

(三)其偈子、每抄三兩句、後云、是：P.2319(甲)のみこの注記がある。「偈文(こゝでは韻文部分を指す)は、二三句を抄写することに後文を云々とする規則とした」の意。五文字目は判読困難だが、文脈に鑑みて「抄」と翻字した。但し、荒見泰史「『大目乾連冥間救母變文』から見た変文の書き換えと經典化」(『敦煌写本研究年報』第一一号、二二―三八頁、京都大学人文科学研究所、二〇一七年三月)は「械」と翻字する。

《散文》

S.2614(原)：夫為七月十五日<sup>日</sup>者、天堂啓戸、地獄門開、三塗業消、□  
P.2319(甲)：夫為七月十五日者、天堂啓戸、地獄門開、三塗消業、十  
P.3485(乙)：夫為七月十五日者、天堂啓戸、地獄門開、三塗業消、十

P.3107(丙)：夫為七月十五日者、天堂啓戸、地獄門開、三塗業消、十

□□□。為衆僧咨下、此日會福之神、八部龍天、盡來教福。□□□□

善增長。為衆僧咨下、此日會福之神、八部龍天、盡來教福。承供養者

善增長。為衆僧咨下、此日會福之神、八部龍天、盡來教福。承供養者

善增長。為衆僧咨下、此日會福之神、八部龍天、盡來教福。承供養者

現世福資、為亡×者轉生於勝處。於是孟蘭百味、□□□三尊、仰大衆

現世福資、為亡×者轉生於勝處。於是孟蘭百味、飾貢於三尊、仰大衆

現世福資、為亡×者轉生於勝處。於是孟蘭百味、飾貢於三尊、仰大衆

現世福資、為亡×者轉生於勝處。於是孟蘭百味、飾貢於三尊、仰大衆

之恩光、救倒懸之窘急。

之恩光、救倒懸之窘急。

之恩光、救倒懸之窘急。

之恩光、救倒懸之窘急。

之恩光、救倒懸之窘急。

昔佛在世時、弟□□□目連、在俗未出家時、名曰羅卜、深信三寶、

昔佛在世時、弟□□□目連、在俗未出家時、名曰羅卜、深信三寶、

昔佛在世時、弟□□□目連、在俗未出家時、名曰羅卜、深信三寶、

昔佛在世時、弟□□□目連、在俗未出家時、名曰羅卜、深信三寶、

昔佛在世時、弟□□□目連、在俗未出家時、名曰羅卜、深信三寶、

昔佛在世時、弟□□□目連、在俗未出家時、名曰羅卜、深信三寶、

敬重大乘。□□□□欲往他國興易。遂即支分財寶、令母在後設齋供×

敬重大乘。於一時間欲往他國興易。遂即支分財寶、令母在後設齋供養

敬重大乘。於一時間欲往他國興易。遂即支分財寶、令母在後設齋供養

敬重大乘。於一時間欲往他國興易。遂即支分財寶、令母在後設齋供養

敬重大乘。於一時間欲往他國興易。遂即支分財寶、令母在後設齋供養

佛×僧訖諸乞來者。及其羅卜去後、母生慳×悵之心、所×囑付資財、

佛×僧訖諸乞來者。及其羅卜去後、母生慳×悵之心、所×囑付資財、

佛×僧訖諸乞來者。及其羅卜去後、母生慳×悵之心、所×囑付資財、

佛×僧訖諸乞來者。及其羅卜去後、母生慳×悵之心、所×囑付資財、

佛×僧訖諸乞來者。及其羅卜去後、母生慳×悵之心、所×囑付資財、

佛×僧訖諸乞來者。及其羅卜去後、母生慳×悵之心、所×囑付資財、

佛×僧訖諸乞來者。及其羅卜去後、母生慳×悵之心、所×囑付資財、

佛×僧訖諸乞來者。及其羅卜去後、母生慳×悵之心、所×囑付資財、

佛×僧訖諸乞來者。及其羅卜去後、母生慳×悵之心、所×囑付資財、

佛×僧訖諸乞來者。及其羅卜去後、母生慳×悵之心、所×囑付資財、

佛×僧訖諸乞來者。及其羅卜去後、母生慳×悵之心、所×囑付資財、

佛×僧訖諸乞來者。及其羅卜去後、母生慳×悵之心、所×囑付資財、

佛×僧訖諸乞來者。及其羅卜去後、母生慳×悵之心、所×囑付資財、

佛×僧訖諸乞來者。及其羅卜去後、母生慳×悵之心、所×囑付資財、

佛×僧訖諸乞來者。及其羅卜去後、母生慳×悵之心、所×囑付資財、

佛×僧訖諸乞來者。及其羅卜去後、母生慳×悵之心、所×囑付資財、



目連に答えて言いました、「おまえの母はすでに阿鼻地獄に墮ち、いま諸々の苦しみを受けておる。おまえは修行を終え真の悟りを得た身とはいえ、知った所でどうしようというのか（どうにもできぬ）。もし天下の僧徒らが解夏（精進明け）して脱する日に、みな力を用いれば、これを救うことができる。」もとより仏は慈悲なるもの、この手立てをお図りになったのです。孟蘭盆を設ける必要があったのは、すなわちそのような次第です。

## 【注】

(四)三塗業消…死後三塗に墮ちる原因となる行いが帳消しになる。三塗は仏語。三途に同じ。即ち火途（地獄道）・血途（畜生道）・刀途（餓鬼道）。梁の僧、僧佑撰『弘明集』（四部叢刊所収明汪道昆本）卷二三に録す東晉の郗超『奉法要』に、「十惡畢犯、則入地獄。抵挾強梁、不受忠諫、及毒心內盛、徇私欺紿、則或墮畜生、或生蛇虺。慳貪專利、常苦不足、則墮餓鬼、其罪差輕少、而多陰私、情不公亮、皆墮鬼神、雖受微福、不免苦痛。此謂三塗、亦謂三惡道（十惡〔次項参照〕）を悉く犯せば、地獄に行く。強硬横暴で、誠実な忠告を聞かず、また毒々しい心を内に燃やし、私情に任せて人を欺けば、畜生に墮ちるか、蛇や蝮の類いに生まれる。欲深く財を惜しみ私利を貪り、いつも不足に思つて苦しんでいるようであれば、餓鬼に墮ち、その罪はやや軽いものの、密か事が多く、心が公正誠実でなければ、みな鬼神に墮ち、わずかな福を受けるとはいえ、苦しみを免れない。これを三塗、または三惡道という」とある。

(五)十善…楽の果をもたらす十の行為。十悪を行わないこと。即ち不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不惡口・不兩舌・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見。

(六)咨下…「咨」は相談する、「下」は補語ととれるが、ここでは文脈にそぐわない。『校注』は「恣夏」と音通、即ち「自恣解夏」の略で、仏僧が陰曆四月十六日から行う座禪修学（坐夏・夏安居）より精進明けする七月十五日、所謂「解夏日」・「自恣日」（自恣とは修行中に犯した罪を懺悔し訓戒を受ける儀式）を指すかとする。本訳注もこの解釈に従った。

(七)此日會福之神…『敦煌變文集』は「爲衆僧咨下此日會福之神」で一句読とするが、項楚校は「此日會福、之神八部龍天」と分読すべきとし、「之」を「諸」の通字とみなす（この通字は敦煌變文にしばしば見られる）。『校注』も項楚校に従う。しかし、唯一句読点がふられたテキストである P310(丙)は「此日會福之神、八部龍天、盡來教福」（この日、福を集める神と八部龍天が、悉く福を求めにやって来る）と分読しており、こちらの方が四字のリズムで語調が整っていることから、本訳注はこの分読に即して訳した。

(八)八部龍天…天龍八部、八部衆の称が一般的。古代インドの邪神であったが、釈尊に教化され、佛法を守護するようになった八種の神々。南宋紹興一三年（一一四三）普潤大師法雲編の梵語辭典『翻譯名義集』二「八部第十四」（四部叢刊所収宋刊本）に「一天、二龍、三夜叉、四乾闥婆、五阿脩羅、六迦樓羅、七緊那羅、八摩睺羅伽」という。摩睺羅伽は摩鉢羅伽とも。

(九)教福…項楚校に従い、「教」は「徼(求める)」の音通字で、福を求めるの意と解釈した。

(一〇)飾貢…『校注』は、目連変文のこの部分とほぼ同様の文が、唐・宗密『孟蘭盆經疏』巻下冒頭の「初、釋題目」に「佛令盆羅百味式貢三尊、仰大衆之恩光、救倒懸之窘急。即從此義以立經名(仏陀は盆羅(孟蘭盆の意か)の各種の食べ物を三尊に供えさせ、大勢(の僧徒)の恩恵を受けて、逆さに吊されるような耐え難き困難から救わせた。この意味から經典の名を立てたのである)」とあることを指摘し、「飾貢」は「式貢」の音通で、「式」を「用(用いる、行う)」と同義とみなす(『爾雅』「釋言」に「式、用也」とある)。本訳注もこの解釈に従った。

(一一)羅卜…後世の目連故事を題材とする文藝では姓が加わり「傅羅卜」とされる。

(一二)大乘…梵語 Mahayana。音写して摩訶衍ともいう。あらゆる衆生を乗せて悟りに導く大きな乗物(教え)の意で、小乗に対する語。仏教の修行者は、声聞(仏弟子。僧院に集団生活をする出家)・独覺(一人で山野において縁起を悟り、人に教えを説くことなく逝く出家。縁覚ともいう)・菩薩(仏陀になることをめざす在家および出家の修行者)の三種に分けられたが、自利に専心する前二者の教えを「小乗」、利他に励む菩薩の道を「大乘」という。

(一三)興易…蔣禮鴻は「經營求利(商売して利益を図る)」と解釈する。句道興撰と題する敦煌出土の『搜神記』(明刻本二種(二〇巻本・八巻本)とは異同があり、文体は口語的である。『敦煌變文集』に録される)にも、「昔有侯光・侯周兄弟二人、親是同堂、相隨多將財物遠方興易(昔侯光・

侯周という二人の兄弟がおり、親と同じ屋根の下に住んでいたが、一緒に多くの財物を持って遠方に商売に行った)」と類似の用例が見られる。敦煌で多用された白話語彙か。

(一四)遂郎…ただちに。敦煌本句道興撰『搜神記』(『敦煌變文集』に「郭歡無神靈覆蔭、遂郎見身、從靈床上起來、具說委由(郭歡は魂の庇護が無くなると、ただちに姿を現し、死者を安置する床から起き上がって、つぶさに詳細を話した)」とある。また、韻文・俗語を交えた四六調の文体で書かれた張鷟撰の唐代傳奇小説『遊仙窟』(『遊仙窟校注』(中華書局二〇一〇年)に「十娘)遂郎逶迤而起、婀娜徐行(十娘は)すぐさままたおやかに立ち上がり、なよなよとした様子でゆっくり歩いた)」と類似の用例が見られる。唐代に白話系文藝で多用された語彙か。

(一五)慳懃慳…S2614(原)の「懃」(判読困難)は上から縦線で消されているように見える。「懃」は「吝」の俗字(明・張自烈『正字通』)。(一六)所×(是)…S2614(原)の「所囑付資財」は「申しつけた所の財産」と解釈される。P2319(甲)・P3385(乙)・P3107(丙)は「所是囑付資財」と作る。「所是」は「所有(あらゆる、全ての)」と同義。敦煌本句道興撰『搜神記』(『敦煌變文集』)に「(段)子京即喚親眷辭別、即令遣造棺木衣衾被褥所是送葬之具(段)子京はすぐに親族を呼んで別れの挨拶を述べ、すぐに棺・衣・布団すべての葬礼の道具を作らせた)」と類似の用例が見られる。

(一七)旬月…一ヶ月、十ヶ月、しばらくの間(十日から一ヶ月ほど)の意がある。ここでは他国へ商売に行ったという状況に鑑みて、十ヶ

月と訳出した。

(二八)口(嚙)齋…精進料理をこしらえて僧に供え、死者の魂を済度(仏や菩薩が衆生を救い、悟りの世界へ導くこと)するよう請うこと。  
 (二九)凡聖…全ての聖者とも解釈できるが、ここでは凡夫(ここでは乞食)と聖者(仏僧及び目連)の意と解釈する。例えば「凡聖一如(常に迷っている凡夫と迷いを超越した聖者とは、本質的に同一である)」という語はしばしば仏典に使われ、唐僧道世撰の仏教百科的類纂書「法苑珠林」巻二八「儀式部」などに見える。

(二〇)阿鼻地獄…阿鼻は梵語 *Avīci* の音写。無間と漢訳する。八大地獄の最下におかれ、父母・出家を殺害するなどの五逆罪や、仏の教えを非難する謗法などの重罪を犯した者が墮ちるとされる。罪人は犯した罪の報いとして、この獄中で猛火に身を焼かれ、極限の苦しみを味わうという。

(二一)三周禮…服喪。所謂三回忌(死後丸二年後)を指すのではなく、三周忌(死後丸三年後)の意であろう。

(二二)宿習…前世に身につけた習性。「宿」が久しい、古いの意から、過去世を宿世という。宿世の善・悪の行為(善業・悪業)が習慣となつてとどまり(習)、その名残がひきつづいて今世以後の生存にかかわることをいう。

(二三)聞法…仏の教えを聞くこと。仏教では、修行をして悟りを開くことを目標とするが、その初めのきっかけとして、聞法を重視する。

(二四)證□□□(得阿羅)漢果…S.2614(原)のみ「果」と作るが「果」の誤りであろう。阿羅漢(羅漢とも略称)とは、梵語 *arhan* の音写で、

漢訳は応供、尊敬・施しを受けるに値する修行者を意味する。もとは仏の別称であったが、のちに仏と区別され、仏弟子の到達する最高の階位とされた。阿羅漢果とは、学道を完成し、もはやそれ以上学修すべきものが無い者。仏教徒が長い修行を経て悟りを開くことを證果という。

(二五)道眼…正しい道を見通し得る識見・眼力と解釈する。敦煌出土「金剛醜女變文」(P.3048)、「佛有他心道眼、當時遙遙觀見。現身公主前頭、交令懺悔發願(仏はその心に道眼をお持ちで、ただちに遙か彼方よりご覧になりました。公主の前に姿を現し、懺悔發願をさせたまいます)」。

(二六)六道生死…六道は、衆生が自ら作った業によって生死を繰り返す六つの世界。即ち地獄・餓鬼・畜生・修羅(阿修羅)・人・天。地獄・餓鬼・畜生を三惡道、修羅・人・天を三善道ともいう。生死は、命あるものが、生まれることと死を繰り返すことを意味し、輪廻と同義にも用いられる。P.3385(乙)は「死生」と作り、「四生」と音通かとも疑われる(六道四生とは、六道に卵生・胎生・湿生・化生の四つの生まれ方の分類を併せたもので、これで輪廻する全ての存在を包括する)。

(二七)從□□(定起)…「定より起つ」と訓読。定とは、梵語 *samādhi* の漢訳。音写して三昧などという。心を一つの対象に集中させて動揺を静め、平穩に安定させること。心の散乱を静めた瞑想の境地。目連がこの時、母を探すために用いた神通力は、禪定を極めて得られる能力であったから、その瞑想状態から覚めたという意味であろう。



(二八)口(含)悲：『敦煌變文集』は「含悲」を上句に続けて読む。『校注』もこれに従う。一方、項楚校は「含悲」は下の句に属するとする。句読点を持つP3107(丙)が「從定起、含悲謔白世尊」としていることにも鑑みて、本訳注は後者に従った。

(二九)見受諸苦：見は「現(いま)」と同義として訳出したが、受身用法とも解釈できる。

(三〇)位登聖果：「位は聖果に登る」と訓読。聖果は阿羅漢果と同義。仏道修行の過程において、修行中の状態(因位)から、修行を完成させた状態(果位)となる。

(三一)解下：『校注』が引用する徐震堦校に従い、「解夏」の音通、即ち坐夏(夏安居)からの精進明けとみなす。

(三二)X(勝)脱：P3485(乙)のみ「脱」の上に「勝」字があるが、意味がとれない。『校注』に従い、「脱」を誤って「勝」と書いてしまったものかとみなす。

(三三)已：以と音通字。敦煌變文で頻用される用法。ここでは「了を用いる」の意。

(三四)慈悲：仏が全ての衆生に対し、生死輪廻しよじの苦から解脱させようとする憐愍の心。智慧と並んで仏教が基本とする徳目。

(三五)用：「須」「要」(しなればならない)と同義か。この用法は高適の唐詩、宋代には『朱子語類』などに見られる。唐・高適「行路難」詩之一(『高常侍集』卷一)、「有才不肯學干謁、何用年年空讀書(才能があっても人に見えて頼み込むことを学ばぬならば、どうして何年もむなしく読書する必要があろうか)」。『朱子語類』(中華書局

一九八一年)卷一四〇、「作詩先用看李杜(詩を作るにはまず李白・杜甫を学ばなければならない)」。

(三六)■■■■：S2614(原)のみ五〜七字程度の判読困難な字があるが、前後の文脈を鑑みるに、ここに何か語句が入るのは不自然である。字形が直後の唱の第一句目「羅卜自從父母没」に似ているようにも見えることから、誤って先に飛んでしまったかと疑われる。

(三七)盂蘭盆：七月十五日の自恣(解夏)を指す。語源は、梵語 ullambana の音写、つまり「倒懸(逆さ吊り)」の意で、地獄での苦しみを意味するというのが通説であったが、イランでは死者の靈魂を urvan (ウルヴァン)と呼ぶことから、イラン語起源説を唱える学者もいる。近年は、自恣(梵語 pravāraṇa) がインド・西域などで変化した語、uravāna なし uravāna などの音写と推定されている。様々な果食を盆に載せて供えることから「盆」の字が当てられたか。

②

《唱》

S.2614(原)：羅卜自從父母没、禮<sup>ム</sup>立<sup>ム</sup>三周復制畢、聞樂道不樂損刑<sup>ム</sup>

P.2319(甲)：羅卜自從父母没、禮<sup>ム</sup>立<sup>ム</sup>三周復制畢、聞樂×不樂損形<sup>ム</sup>

P.3485(乙)：羅卜自從父母没、禮<sup>ム</sup>立<sup>ム</sup>三周復制畢、聞樂×不樂×刑<sup>ム</sup>

P.3107(丙)：羅卜自從父母没、禮<sup>ム</sup>畢<sup>ム</sup>三周復制畢、聞樂×不樂損形<sup>ム</sup>

容<sup>ム</sup>、食旨不甘傷筋骨<sup>ム</sup>、聞道如來在鹿<sup>ム</sup>、一切人天皆無恤<sup>ム</sup>。我今

容、食旨不甘傷肋骨。聞道如來在鹿苑、一切天人皆懺悔。我今

容、食正不甘傷肋骨。聞道如來在鹿苑、一切人天皆懺悔。我今

容、食旨不甘傷肋骨。聞道如來在鹿苑、一切人天皆懺悔。我今

孝道覓如來、往詣雙林而問仏。<sup>(六)</sup>

孝道覓如來、往詣雙林而問仏。云々

覺道覓如來、往詣闍如聞仏聲。

孝道覓如來、往詣雙林如問佛。

【現代語訳】

羅卜は父母が亡くなってより、喪に服すること三年にして終えた。樂の音を聞いても樂しまず姿はやつれ、美食を口にしてもうまいと思わず身体を傷める。聞けば如來が鹿苑ろくえんにおられて、一切の衆生を皆お救いになるとのこと。私（羅卜）は今や道を学び如來を求め、双林へ参って仏様におたずねしよう。

【注】

(一)禮拉三周復制畢：P.3107(丙)が二字目を「畢」とするのは、句末に「畢」字があり、また服喪を終えるという内容に影響されての誤りか。右行間に「泣」字が書き込まれ修正されている。「復制」は制御下に置くことを意味する語だが、それでは文意が通らない。『校注』は「復(覆)墓的禮儀」、すなわち埋葬の三日後に墓を清掃し祭りをおこなうこととするが、この句全体は三年の服喪期間を終えたことをいっている

ると取るべきであろう。服喪を意味する「服制」の音通による誤りか。「三周」は前出[1]注(二)「三周禮」参照。

(1)聞樂道不樂損形容：S.2614(原)に見える「道」字は衍字。P.3485(乙)は「損」字を欠く。

(三)肋骨：「肋」は「筋」の異体字。

(四)聞道如來在鹿苑：S.2614(原)で「鹿苑」は、鹿苑ろくえん、鹿野苑ろくやえんのこと。鹿野苑は梵語 Migadāva の漢訳。他に鹿園、鹿林、施鹿園なども訳される。中インド・サールナートにあり、釈迦が最初に説法をおこなったとされる地(『広説』)。「苑」を S.2614(原)と P.3485(乙)は「苑」に、P.2319(甲)は「苑」P.3107(丙)は「苑」に作り、表記が安定していない。また S.2614(原)では、その右下に小さく「文」のような字が書き込んであるように見えるが意味をとりがたい。

(五)一切人天皆懺悔：人天じんてんは仏教語で人々と神、あるいは人間界と天界をいい、また衆生をさす(『広説』)。P.2319(甲)のみ「天人」とするのは抄写の誤りか。また S.2614(原)は「無懺」、他三本は「懺懺」とするがいずれも「撫懺(慰撫し救うこと)」の誤り。

(六)孝道：「孝」は「學」の異体字。P.3485(乙)のみ「覺」とあるのは発音の近似による誤り、あるいは「仏の道を悟る」の意か。

(七)往詣雙林而問仏：「雙林」は娑羅双樹のこと。釈迦の涅槃の地をさす。後文に「雙林樹下」の形でも見える。P.3485(乙)には雙林の「林」がなく、その次が S.2614(原)と P.2319(甲)とは「而」P.3485(乙)と P.3107(丙)では「如」となっている。続く S.2614(原)・P.2319(甲)・P.3107(丙)が全て「問仏(佛)」なのに対し、P.3485(乙)のみ「問仏聲」

とあり、一応意味は通るが韻が合わない。抄写の際「林」字が脱落し、「問」が「聞」に誤られた後で、字数をそろえるために「聲」を補ったものであるか。P.2319(甲)にはこの句の後に小字で「云々」とあり、以下この韻文の最後までが省略されている。P.2319(甲)は全体を通して、韻文が「云云」に置きかえられて省略される例が多い。

《唱》

S.2614(原)：余時仏自便逡巡、稽首和尚兩足尊。左右摩訶釋梵

P.2319(甲)：××××××××××××××××××××××××××××××××××

P.3485(乙)：余時仏在便逡巡、稽手和尚兩足尊。左右摩訶釋梵

P.3107(丙)：余時仏自便逡巡、稽首和尚兩足尊。左右摩訶釋梵

衆■、東西大將散支神。看前万字頗黎色、項後圓光像月輪。欲知

××××××××××××××××××××××××××××××××××

衆、東西大將散支神。看前万字波利色、項後圓光像月輪。欲知

衆、東西大將散支神。看前万字頗黎色、項後圓光像月輪。欲知

百寶千花上、恰似天邊五色雲。「弟子凡愚居五□、不能捨離去貪

××××××××××××××××××××××××××××××××××

百寶千花上、恰似天邊五色雲。「弟子凡愚居五欲、不能捨離去貪

百寶千花上、恰似天邊五色雲。「弟子凡愚居五欲、不能捨離去貪

嗔。直為平生罪業重、殃及慈母入泉。只恐無常相逼迫、苦海沉

××××××××××××××××××××××××××××××××××  
嗔。真為平生罪業重、殃及慈母入泉門。只恐無常相逼迫、苦海沉  
□為平生罪業重、殃及慈母入泉門。只恐無常相逼迫、苦海沉

淪生死。願仏慈悲度弟子、學道專心報二親。」

××××××××××××××××××××××××××××××××××

淪生死。願仏慈悲度弟子、學道專心報二親。」

淪生死。願佛慈悲度弟子、學道專心報二親。」

【現代語訳】

この時仏様のおられる前にて（羅トは）かしこまり、僧侶・如来にぬかづいて拝礼する。左右には帝釈天と梵天の衆徒、東西には八大將の散支神。胸には卍が玻璃の色にきらめき、後光の丸い輝きは月のよう。百寶千花のうてなの上を知ろうとすれば、まるで天上の五色の雲を見るかのように。「わたくし（羅ト）は凡愚にて五欲の境におり、貪欲や瞋恚の煩惱を捨て去ることができません。ただ平素の罪業が重いため、災いが母上に及んで黄泉へと入ってしまったりました。ただ恐れるのは諸行無常の理に迫られ、苦界に沈み生死の境界へとおもむくこと。どうぞ仏様、慈悲をもってわたくしを濟度下さり、仏道を専心に学び父母の恩に報いるようにさせて下さいませ。」

【注】

(八) 余時仏自便逡巡：「余」は「爾」の異体。四字目はS.2614(原)と

P3107(丙)が「自」で一致するが、それでは釈迦が「逡巡」することになる。「逡巡」はここではあとずさりすることで、恭順の態度を表す水草。P.3385(乙)が正しいとすれば、「仏在」となり、主語として羅卜を補うことで、羅卜が仏のいるところをかしまる意味となるか。P.3485(乙)が他本と異なる場合は誤字である例が多く、ここに限りP.3485(乙)のみが正しいとするのは問題かもしれないが、そのように解釈して訳出した。

(九)稽首和尚兩足尊：P.3385(乙)は「稽首」を音通により「稽手」に誤る。「兩足尊」は、兩足で歩くもの、すなわち人間の中で最も尊い人の意で、仏の尊称。

(一〇)左右磨訶釋梵衆：「摩訶」は梵語 *maha* の音写。摩賀、摩醯、莫訶とも。大きい・偉大なの意で、大・多・勝の三義あるとされるが、語頭に冠して尊称としても用いる。「釋梵」は帝釈天と梵天。帝釈天はヴェーダ神話から仏教に取り入れられ、仏法の守護神とされた。梵天は大梵天王、梵天王などともいい、色界十七天の一つ初禪天の第三、大梵天の王で、常に帝釈天とともに仏の左右に侍すとされる。ただし釈迦をさして釈梵ということもあり、その場合「釈尊の信徒たち」と解されるか。「衆」の右下に、②注(四)「聞道如來在鹿琬」の場合と似た小字があるように見えるが判然としない。

(一一)東西大將散支神：P.3485(乙)は「大」を「散」と誤るが、右行間に「卜大」と書き込んで修正。さらに「散支神」を「散端神」と誤る。散支は仏法護持の鬼神。毘沙門天の眷属である夜叉(葉叉)八大將の一人で、散脂、散脂迦、あるいは僧慎爾耶、半只迦、半支迦など

とも称する。二十八部衆を所管し善悪を賞罰するといひ、鬼子母神の子または夫とされる(『望月佛教大辞典』、『織田佛教大辞典』)。『大毘盧遮那成佛經疏』卷五には「次於北門、當置毘沙門天王。於其左右置夜叉八大將。一名摩尼跋陀羅、……三名半只迦、舊曰散支。(ついで北の門には毘沙門天王を置くべきである。その左右には夜叉八大將を置く。その一は名を摩尼跋陀羅、……その三は名を半只迦、古くは散支といった)」という。

(一二)看前万字頗黎色：「万字(萬字)」は卍。「看前万字」は身体の前につまり胸に卍があること。『佛說長阿含經』卷一では釈尊三十二相のうち「十六、胸有萬字」とする。幸福やめでたさを意味する卍信仰の起源はインダス文明にまでさかのぼり、ヒンドゥー教でヴィシュヌ神の特徴として胸に卍があるとされたのが、後代の仏教において仏の相として取り入れられた(『広説』)。S.2614(原)とP.3107(丙)が「頗黎」P.3385(乙)が不明瞭だが恐らく「波利」とするのはいずれも「玻璃」の音通。

(一三)欲知百寶千花上：百寶、千花ともに仏典に頻出する語。たとえば『佛說觀無量壽佛經』に「見世尊釋迦牟尼佛、身紫金色坐百寶蓮華、目連侍左、阿難在右(見れば釈迦牟尼は、身に紫金の色をまとい百宝蓮華の座にましまし、目連は左に、阿難は右に侍する)」とあり、あるいは『梵網經』「盧舍那佛說菩薩心地戒品」第一〇卷下に「我今盧舍那、方坐蓮花臺。周匝千花上、復現千釋迦。一花百億國、一國一釋迦。各坐菩提樹、一時成佛道(われ毘盧遮那佛、まさに蓮華の台に座す。周圍に千花をめぐらしたその上に、また千の釈迦が現れる。一花

に百億の国あり、一国に一人の釈迦あり。おのおの菩提樹に座し、一時に仏道を成す」とある。これらの例と同様に、ここでも仏の座する蓮華台（蓮華座）を形容する語として使われている。

(一四) 弟子凡愚居五口(欲)：「五欲」は仏教語で、五つの欲（梵語 kāma）。五官による色・声・香・味・所触の五種の感覚対象（五境）に対する欲望。五境を享樂すること。世俗的な人間の欲望。

(一五) 不能捨離去貪瞋：「捨離」は仏教語で、一切を捨て去り煩惱を離れること（『広説』）。「瞋」は「瞋」に同じ。貪瞋は仏教語で、貪ることと怒ること。貪瞋痴すなわち貪欲・瞋恚・愚痴の三毒のうちの一つ（『広説』）。

(一六) 直：S.2614(原)は「直(直)」P.3485(乙)は「眞」ムン P.3107(丙)では紙の破損により失われている。どちらでも意味は通るが、底本に従い「ただ」と訳した。

(一七) 殃及：後世「殃及」及「央及」という二種の表記で、關漢卿の散曲「梧葉兒」「別情」に「春將去、人未還。這其間殃及殺愁眉淚眼（春が行つてしまおうというのに、あの人は帰らず、いま愁いの眉、涙の目に迷惑をかける）」とあるように「迷惑を掛ける」、更には「依頼する」という意味で用いられる。ここでは文字通り「殃い(わざわい)が及ぶ」という方向で理解が可能であり、ここから後世の派生用法が発生したのではないかと思われる。

(一八) 泉口(泉門)：S.2614(原)では「泉」の下半分とその次の字が破損により失われている。他本に従い「泉門」を補う。「泉門」は後で「一掩泉門不再開」「何時更得別泉門」の例があり、黄泉の門また

は墓の門の意と思われる。

(一九) 苦海沉淪生死津：P.3107(丙)は一字目が一部分破損により失われている。「苦海」は仏教語で、苦しみに満ちたこの世、生死流転するこの世。「生死」は前出[注(二六)]「六道生死」参照。

《唱》

S.2614(原)：世尊當聞羅卜說、知其正直不心耶。屈指先論四諦

P.2319(甲)：××××××××××××××××××××××××××××××××××

P.3485(乙)：世尊當聞羅卜說、知其正真不心耶。屈指先論四帝

P.3107(丙)：世尊當聞羅卜說、知其正直不心耶。屈指先論四諦

P.4988(丁)：□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

去、後聞應當沒七遮。縱令積寶陵雲漢、不及交人暫出家。恰似

××××××××××××××××××××××××××××××××××

法、後聞應當沒七遮。縱令積寶陵雲漢、不及交人暫出家。恰似

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

盲龜遇浮木、由如火出蓮花。炎々火宅難逃避、滔々苦海闊無邊。

××××××××××××××××××××××××××××××××××

盲龜遇浮木、由如火出蓮花。炎々火宅難逃避、滔々苦海闊無邊。

盲龜遇浮木、由如火出蓮花。炎々火宅難逃避、滔々苦海闊無邊。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□



重罪。仏身の血を出す（仏を傷つける）・父を殺す・母を殺す・和尚を殺す・阿闍梨を殺す・羯磨轉法輪の僧を破る（教団を分裂させ活動を妨げる）・聖人（阿羅漢）を殺す、の七つ（『広説』）。『梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品第十』卷下に、「若欲受戒時師應問言、汝現身不作七逆罪耶。菩薩法師不得與七逆人現身受戒。七逆者、出佛身血、殺父、殺母、殺和尚、殺阿闍梨、破羯磨轉法輪僧、殺聖人。若具七遮即現身不得戒。餘一切人盡得受戒（受戒せんとする時、師は問われるであろう。「汝は現世で七逆の罪を犯していないか」と。師僧は七逆の人に現世で戒を授けることはできない。七逆とは、仏身の血を出す・父を殺す・母を殺す・和尚を殺す・阿闍梨を殺す・羯磨轉法輪の僧を破る・聖人を殺す、である。もし七遮をそなえていれば、現世で受戒は得られない。他の全ての人は受戒を得られる）」という。また『梵網經菩薩戒本疏』卷六に、「七遮即是七逆。以障受戒故名遮也。（七遮とは七逆のことである。受戒をさまたげるがゆえに遮というのである）」という。

(三)不及交人甄出家×: p.388(乙)は「交」の後に「人」字を欠き、さらに「出家」の後に野線の外にはみ出して「如」と書かれている。これでは文意が通らず押韻もせず、解釈しがたい。

(四)盲龜遇浮木…「盲龜浮木」は、百年に一度浮上する盲目の亀が穴のある流木にめぐりあうことを、仏法に出会うことの困難さにたとえた表現（『広説』）。『佛說泥犁經』には「佛言、人在三惡道難得脫。譬如周匝八萬四千里水中有一盲龜、水上有一浮木有一孔。龜從水中百歲一跳出頭、寧能值木孔中不。諸比丘言、百千萬歲尙恐不入也（御仏が言われた。「人が三惡道にあつて解脱しがたいのは、たとえるなら

周匝八萬四千里の水中に一匹の盲目の亀がおり、水上に一本の流木があつて一つの穴があいているようなもの。亀が水中から百年に一度浮上して頭を出すならば、どうして流木の穴にめぐりあうことができようか。」比丘らは言う「百千万年といえども入れないでしょう）」という。

(五)由如大火出蓮花…「由」は「猶」の通用字。「大火出蓮花」は「火中生蓮華」の表現で仏典に見られ、炎の中から蓮華が咲き出るように極めてまれなこと。『維摩詰所說經』卷中には「火中生蓮華、是可謂希有。在欲而行禪、希有亦如是（火中に蓮華が生じるのは、希有のことといふべきである。欲を持つ身で禪をおこなうのも、そのように希有なことである）」とあり、煩惱のある人の身で修行を行う困難さをいう。

(六)炎々火宅難逃避…p.317(丙)は「炎炎」の二字目が紙の破損で半分欠け、その後のテキストは失われている。卷背に「大目乾連變文一卷 寶護」、「謹請西南方鷄足山賓頭頗羅墮和尚、右今月八日於南閻浮提大唐國沙州、就淨土寺、奉為故父某々大祥追福設供、伏願誓受佛勅、不捨蒼生、興運慈悲、依時降駕。戊寅年六月十六日孤子某々謹疏（謹んで請い願わくは、西南のかた鷄足山なる賓頭頗羅墮（びんずるはらだ）頭盧尊者。十六羅漢の一）和尚様、右、今月八日に南閻浮提（なんえんぶだい）後出[4]注（二）「南閻浮提」参照）大唐國沙州、淨土寺におきまして、亡父某某の二周忌のため追善供養を催しますれば、伏して佛敕を受けんことを願ひ、衆生をお見捨てなく、慈悲を起こされて、時刻のとおりおでまし下さりますように。戊寅の年六月十六日、孤子某某、謹んで記す）、さらに「自從塞北起煙生（塵）詩書」と記されており、『校





四花標様葉清天。千般錦繡補床坐、万道殊幡空裏玄。仏自稱言

四花標様葉清天。千般錦繡補□□、□道珠幡空裏玄。仏自稱言

「我弟□」、号曰神通大目連。

××× ×××××××

「我弟子」、号曰神通大目連。

「我弟子」、号曰神通大目連。

### 【現代語訳】

羅下はこの時仏様の御前にあり、金の香炉からもくもくとかくわしい煙がたちのぼる。うるわしい仏地は六とおりに揺れ動き、四華はひらひらと清らかな天空から舞い散る。様々な錦繡の座席が敷かれ、あらゆる珠玉の旗が天空にかかる。仏様は「わが弟子よ」とお呼びになり、名づけていう「神通大目連」と。

### 【注】

(三三) 怕々…このままでは意味が通りにくい。項楚校は「拍拍」であり、充滿する意にとるべきという。この方向では、范成大【玉樓春】「牡丹」詞（『范石湖集』）〔上海古籍出版社一九八一年〕「石湖詞補遺」に「雲横水繞芳塵陌。一萬重花春拍拍（芳しい塵のただよう小道に雲は横たわり水は繞り、一萬重もの花に春は満ちる）」とあるように、「春」と組み合わせた例が多く見られる。「拍拍」は韓愈の「病鴟」（『韓昌黎

詩集編年箋注』（中華書局二〇一二年）卷一一）に「屋東惡水溝、有鴟墮鳴悲。青泥掙兩翅、拍拍不得離（家の東側の汚いどぶに、鴟が落ちて悲鳴をあげている。泥が両の翼を掩い、バタバタと羽ばたいても逃れられない）」とあるように、バタバタという音を表す擬音語としても用いられているが、この場面では香炉から煙がたちのぼる様子を表現しているの、項楚校に従った。

(三四) 六種瓊林動天地：P.3489(乙)は「林」字を欠き、句末の二字がS.2614(原)は「天地」なのに対し、P.3485(乙)とP.4988(丁)はともに「大地」に作る。項楚校は後者が正しいとする。次の句の「清天」と対をなすこともあり、「大地」の誤写と解した。「六種…：動大地」はいわゆる「六種震動」で、仏が説法する時の瑞相として、大地が六種類の震動を起こすこと。六種のうちわけは仏典により分かれるが、『華嚴經』では動・起・涌・覺（または撃）・震・吼とする（『広説』）。「瓊林」は仏地や仙境の美しいさまを形容する語。

(三五) 四花標様葉清天…「四花（四華）」は天が四種類の花を降らせて供養する奇瑞。『妙法蓮華經』卷一には「是時天雨曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華、而散佛上及諸大衆、普佛世界六種震動（この時天は曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華を降らせて、御仏と諸々の衆生の上にまき散らし、あまねく佛の世界が六とおりに揺れ動いた）」とある。「標様葉」の三字は、このままでは意味をとりがたい。「標様」については、風に吹かれて舞い上がる様子を表す「飄揚」の音通か。あるいは「飄漾（ただよう）」との音通とも考えられる。『校注』は徐震堦校を引き、光り輝く意味の「標映」

ととるべきという。「葉」については、『校注』は「協」に読むべきと  
いい、その場合和合する意味となる。「葉」「協」ともに「叶」を異体  
字とする。「葉」のままて解釈するとすれば、葉が散るように四華が  
天から舞い散るという動詞用法にとれるか。訳文ではそのように解し  
た。

(三三六)補：『校注』にいうように、敷く意味の「鋪」の誤りであろう。

(三七七)万道殊幡空裏玄：「道」は種類の意。S.2614(原)とP.3485(乙)  
が三字目を「殊」に作るの「珠」の誤り。また三本とも七字目を「玄」  
とするが、ともに『校注』のいうように「懸」の音通ととるべきであ  
ろう。

(大賀)

③

《散文》

S.2614(原)：當時目連於雙林樹下、證見得阿羅漢果。何為如此。准法

P.2319(甲)：當時目連於雙林樹下、證×得阿羅漢果。何為如此。准法

P.3485(乙)：當時目連於雙林樹下、證×得阿羅漢果。何為如此。准法

P.4988(丁)：□□目連於雙林樹下、證×得阿羅漢果。何為如此。准法

華×經云、窮子品、先受其價、然後除糞。此即是也。先得阿難×果、

華×經云、窮子品、先受其買、然後除糞。此即是也。先得阿羅漢果、

華花經云、窮子品、先受其買、然後除糞。此即是也。先得阿羅漢果、

華×經云、窮子品、先受其位、然後除糞。此即是也。先得阿羅漢果、

後當學道。看目連深山坐禪之處。<sup>(五)</sup>

後當學道。看目連深山坐禪之處。其父生於天宮。<sup>(六)</sup>

後當學道。看目連深山坐禪之處。

後當學道。看目連深山坐禪之處。若為。<sup>(七)</sup>

【現代語訳】

その時目連は沙羅双樹の下にて、阿羅漢の悟りを開きました。何となれば、法華経に申します。「窮子品」に、先払いで賃金をもらって、後で便所掃除をするというのは、このことなのです。まず阿羅漢の悟りを得て、その上で道を学ぶべきなのです。目連が奥山にて座禪をする場面をご覧あれ。

【注】

(一)證見：この語は一般に証人の意味で用いられるが、後文に「證見三明出生死（三明の悟りに達して生死を抜け出しております）」とあるように、仏教語としては悟りを開くことを意味し、直前て出た「證」の二音節化と思われる。『法苑珠林』卷一〇七「受戒篇 三聚部」に見える「得除煩惱已、證見十方佛（煩惱を取り除き終えることができ、十方仏を悟り）」とあるのも同様の例かと思われるが、この場合は視覚的な意味を伴うかもしれない。他本には「見」がなく、敦煌変文では「證得」の方が一般的であるが、前述の例もあり、どちらが原型かは定めがたい。

(二)法華經・窮子品…「窮子品」は『妙法蓮華經』「信解品」のこと。『法華義疏』卷八に「藥草喻品」について、「問…文具舉雲雨草木四事、何故偏題藥草名耶。答…就文而言、藥草在前喻機感扣聖、雲雨居後譬形聲應物。要由感方應、故從初立名。又今述中根領解、故以藥草題品。雲雨不爾、故不標名。問…舉藥草以述成、故云藥草品者、上明窮子以領解、應云窮子品。答…窮子通迷悟、今言信解、故用別以立名。卉木通於毒藥、今云藥草亦從別爲稱（問…文面では雲・雨・草・木の四事がすべて取り上げられているのに、なぜ藥草の名だけを題にするのですか。答…文面について言えば、藥草が前にあつて、あるきっかけから感得して真理を求めたことをたとえ、雲雨は後にあつて形と音声が物に応じて存在することをたとえる。まとめて言えば感得することがあつてはじめて反応を得られるということだから、初めの部分を題名としたのだ。またここでは中根「眞の悟りを得ていない縁覚」が理解することを述べているので、藥草を品の題としたのだ。雲や雨はそうではないから題名としないのだ。問…藥草を取り上げて成就に至ることを述べるので「藥草品」というのであれば、前の部分で窮子のことを明快に述べて理解させているのは「窮子品」というべきではありませんか。答…窮子は迷いと悟りをはっきりさせるもので、ここではそれを「信解」というので、別にこの名を立てたのだ。花や木は毒藥にもなりうるものなので、ここで「藥草」というのも区別するために別の名をつけたのだ」とあり、「信解品」の内容を示す別称として用いられていたものと推定されるが、他にあまり用例はない。ここは『妙法蓮華經』「信解品第四」に見える有名な「窮子」の故事を踏まえる。

長者が、長く異郷にあつて貧困の身となった息子にめぐりあい、父とは知らせずに、便所掃除をするようにしむける場面である。「密遣二人形色憔悴無威德者、汝可詣彼、徐語窮子。此有作處、倍與汝直。窮子若許、將來使作。若言欲何所作、便可語之、雇汝除糞、我等二人亦共汝作。時二人即求窮子。既已得之、具陳上事。爾時窮子先取其價、尋與除糞（密かに二人のやつれた外見で威嚴のない者を遣わして言った。「おまえたちはあそこに行つて、窮子に『仕事があつて金が稼げる』』と言え。窮子が承知したら、連れてきて仕事をさせるのだ。もし何をするのかと問われたら、こう言うがいい。『おまえを備つて便所掃除をさせるのだ。我々二人もおまえと一緒にやろう』」。そこで二人の使用人はすぐに窮子を捜し、見つけると、詳しく上のことを述べた。その時窮子はまず報酬を受け取り、その後便所掃除をした」。長者は仏、窮子は衆生をたとえるもので、先に報酬を与えるというのは、当初から仏が衆生に恵を施していることをいう。P.3485(乙)が「法華經」とするのは誤りかと思えるが、『智證大師請來目錄』に「妙法蓮華花經鈔六卷」「妙法蓮華花經科文二卷」とあり、この名称が唐代に用いられていた可能性も否定できない。

(三)先受其價：P.2319(甲)・P.3486(乙)が「賈」とするのは通用字。P.4988(丁)が「位」とするのは、字形の類似に由来する誤りかと思われる。

(四)阿難果・阿難（アーナンダ）は釈迦の十大弟子の一人だが、ここでは語の類似に由来する単純なミスと思われ、他の二本に従つて「阿羅漢果」とするのが妥当と考えられる。「阿羅漢果」は前出[注(二四)]

〔證□□□(得阿羅)漢果〕参照。

(五)看目連深山坐禪之處…こうした「<sup>レ</sup>之處」という表現は、この後ほとんどのセリフの末尾、韻文の直前に位置する部分に見える。これは絵解き形式によったものと推定されるいわゆる「変文」にほぼ共通する藝能用語で、「<sup>レ</sup>」の部分がその時に示される画題であるものと推定される。今日の一般的な絵解きでは、国や地域を問わず大幅の画にコマ割り形式でさまざまな場面が描かれるのが一般であるが、一面面に多様な場面が描かれていた可能性(壁画である可能性も含む)や、何枚かの画を掛け替えた可能性もあるものと思われる。「目連變文」において「看」を伴うのは、この最後の「且看母飯處」のみであり、最初と最後のみで聴衆への具体的な呼びかけが行われていることは興味深い。

(六)其父生於天宮:P.2319(甲)のみ「看目連深山坐禪之處」の後にこの一文がある。衍字かと思えるが、P.2319(甲)はうたの部分を大幅に短縮し、ストーリーを追うことを主体としている点から考えれば、座禪の後で天宮に赴いて父と対面する部分の前にセリフによる説明がないため、あえてこの一文を補った可能性も考えられる。

(七)若為:P.4988(丁)のみこの語あり。「若為」は『南齊書』(中華書局一九七二年)巻五四「高逸傳」の明僧紹の伝に「天子若來居士若爲相對(天子がもし來たら居士はどう答えるか)」とあるように、方法や状況をたずねる疑問詞である。「王昭君變文」(P.2553)に「遂指天嘆帝鄉而曰處、若為陳說(そこで天を指して都のことを嘆じて言う場面、いかに言うかとなれば)」とあるように「<sup>レ</sup>處、若為陳說」とい

うセリフの後にはうたが続く形が「漢將王陵變」(P.3627)「張淮深變文」(P.3611)に見えるところから見て、後世の『水滸傳』などに多く見える「怎生<sup>レ</sup>」と問いかけた上で「但見」などの美文・韻文を導く事例と同様の定型表現と思われる。従って、ここに「若為」があることにも問題は無いように見えるが、他の例のように後に「陳說」もしくはそれに類した動詞がないこと、「目連變文」には他に例がなく、本にもこの語がない点から考えれば、P.4988(丁)を抄写した人物が、うたの前の定型として存在すべきだという意識のもとに補った可能性がある。

《唱》

S.2614(原):目連剃除須髮了、將身便即入深山。<sup>(五)</sup> 幽深地淨無人處、  
 P.2319(甲):目連剃除須髮了、將身便即入深山。幽深地淨無人處、  
 P.3485(乙):目連剃除須髮了、將身便即入深山。幽心地淨無人處、  
 P.4988(丁):目連剃除須髮了、將身便即入深山。幽深地淨無人處、  
 便即觀空而坐禪。<sup>(一)</sup> 坐禪觀空知善惡、降心住心無所著。對鏡澄々、不  
 便即觀空而坐禪。云云××××× ××××××× ×××××  
 便即觀空而坐禪。坐禪觀空知善惡、降心住心無所著。對鏡澄々不  
 便即觀空學坐禪。××××××××× 降心住心無所著。對鏡澄々不  
<sup>(一四)</sup> 動遙、左脚還須押右脚。端身坐×盤石×、以舌著上尊。<sup>(一六)</sup> 白骨盡皆  
 ×× ××××××× ××××××× ××××××× ×××××



(一五)端身坐盤石：P.4988(丁)は「端身坐著盤石上」とする。韻から考えてこの句から五言句になるはずであり、おそらく前が七言句であることに引かれて七言に改めてしまったものと思われる。「坐盤石」は「寒山詩」に「我向前谿照碧流、或向巖邊坐盤石。心似孤雲無所依、悠悠世事何須覓（私は前の谷川で碧の流れに姿を映したり、岩山のあたりで大岩にすわったり、心は一人浮かぶ雲のように頼るところもなく、遙か遠い俗世のことなどに用はない）」とあるように、中国の仏教関係の文献にはよく見える言い回しである。

(一六)上尊：S.2614(原)以外は「罽」。「罽」の表記が不安定な状況を示すか。項楚校は『禪秘法要經』に坐禪の法として「閉目以舌拄腭」とあることなどから「著」は「拄」とすべきではないかとするが、「著」のまま大きな問題があるわけではない。

《唱》

- S.2614(原)：當時群鹿<sup>(一七)</sup>正吟林、逼近清潭望海頭。明月庭前聽法  
P.2319(甲)：×××××××× ×××××××× ××××××××  
P.3485(乙)：當時群鹿正吟林、逼近<sup>(一八)</sup>潭望海頭。明月庭前聽法  
P.4988(丁)：當時群鹿正吟林、逼近清潭望海頭。明月庭前看法
- ×眼、青山松下坐唯禪。天邊海氣無<sup>(一九)</sup>遐換、隴外青山望<sup>(二〇)</sup>戍樓。秋  
×× ×××××××× ×××××××× ×××××××× ×  
■眼、清山松下坐唯禪。天邊海氣無<sup>(二一)</sup>遐換、隴外清山望<sup>(二二)</sup>戍樓。秋  
×眼、青山松下坐唯禪。天邊海氣如<sup>(二三)</sup>霞喚、隴外青山望<sup>(二四)</sup>戍樓。秋

風瑟々林中<sup>(二五)</sup>度、黃葉飄零水上<sup>(二六)</sup>浮。目連<sup>(二七)</sup>冥坐虛無境、內外證心漸々  
×××××××× ×××××××× ×××××××× ××××××××  
風瑟々林中<sup>(二八)</sup>度、黃葉飄零水上<sup>(二九)</sup>浮。目連<sup>(三〇)</sup>冥坐虛無境、內外證心漸々  
風瑟々林中<sup>(三一)</sup>度、黃葉飄零水上<sup>(三二)</sup>浮。目連<sup>(三三)</sup>冥坐虛無境、內外證心漸々  
脩<sup>(三四)</sup>。通達<sup>(三五)</sup>聲聞居望地、出入<sup>(三六)</sup>山間得自由。  
×××××××××× ××××××××××  
脩。通達<sup>(三七)</sup>聲聞居望地、出入<sup>(三八)</sup>山間得自由。  
脩。通達<sup>(三九)</sup>聲聞居望地、出入<sup>(四〇)</sup>山間得自由。

【現代語訳】

その時群れなす鹿は林にうたい、澄んだ池に近づいて海のほとりを望む。明月の庭にて心に法眼の教えを聞き、青山の松の下にてひたすら禪定に入らんとして坐する。天の果てなる海よりたちのぼる気は変化の気配もなく、隴山のかなたなる青山にとりでの望樓を望む。秋風はさわさわと林の中を通り抜け、黄色い葉はひらひらと水上に浮かぶ。目連は虚無の境地に座禪を組んで、身体の内外にて悟りへと次第に修行を進めゆく。声聞の悟りに達していながらに遠方を見ることができ、山を出入りするの思いのまま。

【注】

(一七)當時群鹿正吟林：P.3485(乙)・P.4988(丁)は「正吟林」S.2614

〔原〕も「止」か「正」か字形が定かではない。「群鹿」は仏典に用例の多い語。この句の意味は取りがたい。「止」であるとすれば、「群れなす鹿は林で鳴くのをやめ」ということか。「正」なら「鳴いている折しも」となる。いずれにせよ、「吟林」という言い回しは例がない。

〔二八〕法眼：『般若波羅蜜多經』「初分學觀品」に「欲得五眼。所謂肉眼・天眼・慧眼・法眼・佛眼、應學般若波羅蜜多」とあるように「五眼」の一つ。一切を見て取る眼のこと。「聽法眼」という例はないが、おそらく「法眼」が授けてくれる教えに耳を傾けるということか。P.4988

〔丁〕は「看法眼」だが、眼に合わせて改変した結果かと思われる。

〔二九〕天邊海氣無遐換：以下、おそらくは心澄ませた目連の心象の形容。当時の詩的な表現が多用される。「海氣」は海から立ちのぼる気のこと。ただし、西方については「青海」つまり沙漠（瀚海）について用いる例もある（今日実在する大湖である青海とは異なる。杜甫「送楊六判官使西蕃」詩〔杜詩詳注〕〔中華書局一九七九年〕卷五）の「送遠秋風落、西征海氣寒（はるかに赴く人を見送る時秋風はやみ、西へと旅立てば青海からの気は寒い）」。「蜃気楼を意味する例も多いが、ここではあたらないであろう。次句との関係で、東の海と西の隴山を対比させているか、あるいはいずれも西方の異域を意識しているかは定かではない。仮に前者と見て諷す。「無遐換」の意味は取り難い。P.4988

〔丁〕は「如霞暎」もしくは「如霞晚」のように見える。後者であれば「はるかな海から漂う気は夕焼けの如く」ともとれる。「遐」は通常遠いことを意味し、副詞に用いた例としては、元稹「鶯鶯傳」〔大平廣記〕〔中華書局一九六一年〕卷四八八）に「但恨僻陋之人、永以遐棄（恨

めしいのはつまらない人間で、とこしえに遠く棄てられてしまうことです）」などがある。これに従えば、「は遙か遠くで変わることなく」と読めないことはない。項楚校は「無改換」で入禪の後の境地をいうとする。潘校は「如霞暎」。あるいは「遐」が「假」と通用して「換わる」とまとてない」という意味である可能性も想定できる。とりあえずS2614（原）の原文に沿った形で訳しておく。

〔二〇〕隴外青山望戍樓：「隴外」は隴山のかなた、つまり西域のこと。白居易の「中秋月」詩〔白居易集箋校〕〔上海古籍出版社一九八八年〕卷一六）に「萬里清光不可思、添愁益恨遠天涯。誰人隴外久征戍、何處庭前新別離。失寵故姬歸院夜、沒蕃老将上樓時。照他幾許人腸斷、玉兔銀蟾遠不知（万里にわたる清らかな光は謎めいて、愁い悲しみを増しつつ天の果てまであまねく照らす。隴山のかなたに出征して久しいとは誰か、新たに別れを告げるのはいずこの駅亭か。愛を失ったかつての寵姫が部屋に帰る夜、異民族に捕らわれた老将が楼閣に登る時。どれほどの人を照らして腸断えんばかりに悲しませるのか、玉兔と銀蟾は遠くで知らぬ顔）」とあるのが、全体にこの前後と似通う。

〔二一〕秋風瑟瑟林中度：劉楨「贈從弟」三首之二〔文選〕〔上海古籍出版社一九八六年〕卷二三）の「亭亭山上松、瑟瑟谷中風（高々と茂る山の上の松、さわさわと吹く谷の中の風）」以来、「瑟瑟」は風の形容として頻用されるが、秋風と結びつく事例の出現は意外に遅い。劉希夷「掃衣篇」〔全唐詩〕〔中華書局一九六〇年〕卷八二）に「秋天瑟瑟夜漫漫、夜白風清玉露溥（秋はさびしく夜は果てしなく、夜は白く風は清く玉なす露はしとど）」とあるのは、おそらく秋風との連想

のもとに用いられている。こうした表現を踏まえたものか。P.4988 (丁)は「中」に当たる部分に「鹿」を消したように見える文字があり、判読不能。

(二二)黄葉飄零水上浮・李咸用の「題陳正字林亭」詩(『全唐詩』卷六四六)に「曉煙輕翠拂簾飛、黄葉飄零弄所思(朝靄の中カワセミが軽やかにすだれを払うように飛び、黄葉がひらひらと思いを乱す)」と見える。また『佛祖歷代通載』卷二〇に引く「無盡燈記」には「鏡燈燈鏡本無差、大地山河眼裏花。黄葉飄飄滿庭際、一聲砧杵落誰家(鏡と燈には元来違いはなく、大地も山河も眼の中に浮かぶ花の如くはかないもの。黄葉は舞って庭先に満ち、一声響く砧は誰の家のものか)」とあり、これは後世まで知られた偈であつたらしい。

(二三)宴坐・『大般若波羅蜜多經』「初分善學品」に「有菩薩摩訶薩、隱在山林空澤曠野、獨居宴坐、修遠離行時、有惡魔來到其所(修行者が山林や水の涸れた池や曠野に身を隠し、一人で暮らして坐し遠離の行をするとき、悪魔がやって来て)」とあるように、座禪をすること。

(二四)内外證心漸々脩・『大般若波羅蜜多經』「分空相品」に「持諸功德迴向無上正等菩提、雖具修空無相無願。而於實際無作證心、勿墮聲聞及獨覺地(さまざまな功德を堅持して最高の悟りを目指す者は、すべて空にして、差別の相もなく、願求すべきものもないという境地を目指し修行を重ねても、実際には心に悟ることができず、声聞・独覺の段階に堕ちてしまうことがないようにせよ)」とあるように、「證心」は心に悟ること。唐代にも皎然「送至嚴山人歸山」詩に「初到人間柳始陰、山書昨夜報春深。朝朝花落幾株樹、惱殺禪僧未證心(俗世に来

た時は柳が蔭を作り始めたところだったが、昨夜山から春も深くなたとの便りがあつた。毎日何本の木から花が散ることか、いまだ悟らぬ禪僧は心悩ますばかり)」とあるように、仏教関係の例がある。こゝは「身体の内外で悟りを開くべく次第に修行を進めていく」ということか。P.4988(丁)は「澄心」とし、項楚校はこれに従うべきだとする。「内にも外にも心を澄ませる行に次第に入っていく」という意味で、より理解しやすいが、ここでは底本を尊重してその方向で訳しておく。

(二五)通達聲聞・「声聞」は、大乘仏教では、仏の教えに従って修行して自己の悟りのみを追求するものとして、小乗のものと同される。従つて、劣つた悟りということになるが、『佛說首楞嚴三昧經』には「樂聲聞者示聲聞乘。樂辟支佛者示辟支佛乘。樂大乘者爲示大乘。通達聲聞法而不入聲聞道。通達辟支佛法而不入辟支佛道。通達佛法而不畢竟滅盡(声聞を楽しむ者には声聞乘を示し、辟支仏を楽しむものには辟支仏乘を示し、大乘を楽しむ者には大乘を示す。声聞に通じながら声聞の道に入らず、辟支仏に通じながら辟支仏の道に入らず、仏法に通じながら最終的にすべてを滅しつくすことはない)」とあり、ここで目連が一人で修行している点から考えて、一人悟りを求める声聞の悟りに達したということか。

(二六)居望地・「望地」の意味ははっきりしない。「望」は家柄などがないことを意味し、比喩的に悟りを開いて高い地位にあるということかもしれないが、あるいは遠い地を望み見ることができるといふことかとも思われる。次句から考えて、とりあえず後者の方向で訳しておく。





ば隠され、碧の布掛けた窓はすべて白玉づくり。錫杖にて門を叩くこと数度、胸には我知らず涙がしとど、長者が出てともに語り、合掌してまず論ずるは孝行の情。

## 【注】

(一九) 來如霹靂急：P.4988(丁)が「來如」を「如來」とするのは、対句として成り立たない。「如來」が頻出することに由来する誤りか。次の「霹靂」も「歴辟(辟)の下に何かあるが判読不能」とするが、こちらは倒置の記号が附されている。この言い回しも仏典に例があるが、多くは音の大きさを喩えたものである。『佛說佛名經』卷二二の「刀刀相鉞、亦如霹靂。從空而來、刺罪人頭(刀も打ち合って、やはり雷のように、空から降って、罪人の頭を刺す)」は、やはり音かとも思われるが、突然天から来るさまの形容とも取れる。王維の「老將行」(『王右丞箋注』〔上海古籍出版社一九六一年〕卷六)に「漢兵奮迅如霹靂、賊騎崩騰畏疾藜(漢の兵は雷のように奮闘し、賊の騎兵は総崩れになって撒き菱を警戒する)」とあり、前の句に「迅速」とあるのと合わせて考えると、この詩がここに影響している可能性もある。これらの表現は次項で引く『孫子』に由来するか。

(三〇) 似一團風：『佛本行集經』「五百比丘因緣品」に「我念往昔、有一馬王、名雞尸。形貌端正、身體白淨、猶如珂雪、又若白銀、如淨滿月、如君陀花。其頭紺色、走疾如風、聲如妙鼓(昔のことを思い出せば、一頭の馬の王がいた。名は雞尸。姿は端正で、体は純白なること、白雪の如く、満月の如く、君陀花の如くであった。頭は紺色で、走れば

速きこと風の如く、声は妙なる太鼓のようであった)」とあるように、仏典でも速いことの形容として用いられる。この言い回しは、有名な『孫子』(四部叢刊所収明談愷刻本)「軍争」の「故其疾如風、其徐如林、侵掠如火、不動如山、難知如陰、動如雷震(ゆえに速ければ風の如く、緩やかであれば林の如く、敵を攻め奪う時には火の如く、動かない時には山の如く、知り難きこと陰の如く、動けば雷のとどろくが如し)」に依拠するものと思われる。前句の「如霹靂急」も「動如雷震」と関わるかもしれない。

(三一) 海鷹啼繪徽：P.3785(乙)は「海鷹」のように見えるが、次句の対になる語が「鶴鷹」である以上、「鷹」ではありえない。字形が類似している点から考えて「鷹」か。「海鷹」という語の用例は多くはないが、王昌齡の「緱氏尉沈興宗置酒南谿留贈」詩(『全唐詩』卷一四〇)に「海鷹時獨飛、永然滄洲意(海雁が時としてひとり飛んでいく、はるかな隠遁の気持ちかわきあがる)」と見える。なおここで言う「海」は、蘇武の故事から考えて北海(バイカル湖)であろう。P.4988(丁)は「海鳥」とする。この方が自然ではあるが、P.4988(丁)には改變の形跡が多い点、P.3785(乙)が「鷹」とするのが「鷹」と字形が似ているために誤ったものと思われる点からすると、「海鷹」が本来の形である可能性が高いものと思われる。「繪徽」を『校注』は「繪微」とするが、各本いずれも「繪微」に見える(P.4988(丁)の二字目は不鮮明だが)。「繪」は「繪」と通用する。「繪微」はいくるみ、つまり紐を付けた矢のこと。「繪微」という例は見えず、「微」と「微」の字形が類似することに由来する誤りかと思われるが、「微」も糸という

意味があり、通じないことはない。

(三三) 鶻鷹脱籠…『校注』は項楚校に従って「蒼鷹」とすべきだとする。ただ、宋の陸佃の『埤雅』卷六には「一歳曰黃鷹、二歳曰鶻鷹、三歳曰鶻鷹」と見え、この語も存在はするようである。『父子合集經』「廣果天授記品之餘」に「若能達彼法性空、如彼飛禽脱籠網（空という真理に到達すれば、空飛ぶ鳥が籠や網から逃れたようなもの）」と見える。P.4988(丁)は「納籠」とするが、この語は用例がなく、上の例から見てもおそらく字形の類似による誤りと思われる。

(三三) 煙霞碧…「碧霞」は李白の「題元丹丘山居」詩（『李太白全集』〔中華書局一九七七年〕卷二五）に「羨君無紛喧、高枕碧霞裏（あなたが俗世の煩いもなく、碧の霞の中で枕を高くしているのがうらやましい）」とあるように、道士（元丹丘は道士である）や隠者が隠遁する場に漂うものと認識される。「碧霞元君」が泰山の女神であることは、この語が道教と深く関わることを示す顕著な例といってよい。ここでは道教系の語を用いて清浄な環境を表現したもののか。

(三四) 天淨…杜甫「野望」詩（『杜詩詳注』卷八）に「清秋望不極、迢遞起層陰。遠水兼天淨、孤城隱霧深。澄んだ秋にながめは果てしなく、はるかに雲が起る。遠くの川は天とともに清く、ぼつんとある町は深く霧に閉ざされる」とあるのはややここに近い例である。P.4988(丁)が「无淨」とするのは、字形の類似に由来する誤りと思われる。

(三五) 神通得自在…『方廣大莊嚴經』「讚歎品」に「遊戲神通得自在、而於世間無與等（この世ならぬ世界に遊んで思うがまま、世にこれと並ぶものとしてありはせぬ）」と見える。

(三六) 擲鉢…『賢愚經』「頂生王品」に「波羅捺國、有一居士。見辟支佛、

來從乞飯、居士卽時、以食施與、因復勸請、令說經法。其辟支佛、辭云不能、擲鉢虛空、騰踊而逝。居士念曰、斯人神力、變化無方（波羅捺國に一人の居士（俗人信者）がいた。辟支仏（修行者）が托鉢に來たのを見て、居士はすぐに食事を施し、法を説かせようとした。辟支仏はできないと辞退すると、鉢を虚空に投げて、躍り上がった行ってしまった。その人が思うには、この人の神通力は、変化無限だ）」とあるように、投げ上げた鉢にのって飛んでいくという事例は仏典に多い。

(三七) 一向子…たちまちということか。直後に見える「一向」と同じと思われるが、この形の例はあまり見られない。

(三八) 耳裏唯聞鼓樂聲…異界に赴く際には、『太平廣記』卷三六「神仙三十六」「李清」に「清遂閉目、覺身如飛鳥、但聞風水之聲相激（李清がそこで目を閉じると、体が飛ぶ鳥のようで、激しい風と水の音が聞こえるだけだった）」とあるように、目を閉じて耳だけで気配を感じるのが通例。ここでは目連は目を閉じているわけではないが、そうした定型に沿って叙述しているのであろう。

(三九) 映…「映」の通用字。前のものが後のものを隠すこと。多くは色彩が相互に引き立てあうことを含む。杜牧「江南春」詩の名句「千里鶯啼緑映紅」はその例。

(四〇) 碧牖渾論白玉成…各本とも異同はないが、「渾論」は通常「渾淪」もしくは「渾命」と表記される。丸ごとそうであることを示す形容語。この表記の事例はほとんどないが、やはり敦煌文書に含まれるP.2555

の詩集に見える劉長卿「高興歌」(現行の劉長卿の詩集には見えないが、『敦煌賦校注』(甘肅人民出版社一九九四年)は「酒賦」として収録する)には「有膽渾論天許大(胆はまるまるとんでもなくでかい)」とあり、敦煌では普通に用いられていた表記かと思われる。「碧」つまりエメラルドの窓がすべて玉作りとは矛盾しているようであるが、「碧牖(窓)」が「碧紗窗」の略であることから考えて、碧色のカーテンの掛かった窓ということか。

(四一)曾前不覺淚濫：この句は六字で一字不足する。『校注』は「濫濫」とするが、P.3485(乙)・P.4988(丁)が「交盈」とするのに従うべきか。「濫」と「盈」は通用字。一方、P.3485(乙)・P.4988(丁)は一字目が判読不能で、P.3485(乙)は「覺」もなご。

(四二)如共語：意味から「う」とP.4988(丁)の「而共語」が適切だが、「而」と「如」は敦煌文書では混用される傾向にある。

(四三)中孝情：このままでは意味を取りがたい。項楚校が言うように「忠孝」の誤りか。

(小松)

4

《唱》

- S.2614(原)：啟言「長者相識否。頻道×南閩浮提人、少小身遭父
- P.2319(甲)：□□ □□□□□□ □□□□□□ □□□□□□
- P.3485(乙)：啟言「長者相識否。貧道是南閩浮提人、小マ身遭父
- P.4988(丁)：啟言「長者相識否。貧道是南閩浮提人、少小身マ遭父

- 母喪。其家大富小兒孫、孤婢更亦無途當。頻道慈母号清提、阿
- □□□□□□ □□□□□□ □□□□□□ □□□□□□
- 母喪。其家大富少兒孫、孤婢更亦無途當。貧道慈母号清提、阿
- 母喪。其家大富少兒孫、孤瓊更亦无途當。貧道慈母号清提、阿
- 耶名輔相。一生多造福福田、亡過合生此天上。可連富貴嬌奢地、
- □□□□□□ □□□□□□ □□□□□□
- 耶名輔相。一生多造福福田、亡過合生此天上。可連富貴驕奢地、
- 耶名輔相。一生多造福福田、亡過合生此天上。可連富貴嬌奢地、
- 望觀令人心悅暢。鐘鼓鏗鎗知雅音、鼓瑟也以聲遼亮。哀ウ々劬勞
- □□□□□□ □□□□□□ □□□□□□
- 望都令人心悅暢。鐘鼓鏗鎗和雅音、鼓瑟也以聲遼亮。哀ウ々劬勞
- 望觀令人心悅暢。鐘鼓鎗鏗和雅音、瑟琴也以聲遼亮。哀ウ々劬勞
- 長不捨、乳哺之恩難可忘。別後安和好ウ在否。比來此處相尋訪。」
- □□□□□□ □□□□□□ □□□□□□
- 長不捨、乳哺之恩難可妄。別後安和好ウ在否。比來此處相尋訪。」
- 長者聞語意以悲、心裏迴徨出語遲。「弟子閩浮有一息、不省既有
- □□□□□□ □□□□□□ □□□□□□

長者聞言意以悲、心裏迴徨出語遲。「弟子閻浮有一息、不省既有長者聞言意以悲、心裏迴徨出語遲。」弟子閻浮有一息、不省既有

出家兒。和尚莫恠苦盤問、世上人倫有數般。乍觀出語為將異、  
□□□□ □□□□ □□□□ □□□□ □□□□ □□□□ □□□□ □□□□

出家兒。和尚莫恠苦盤問、世上人倫有數般。乍觀出語將為異、  
出家兒。和尚莫恠苦盤問、世上人倫有數般。乍觀出語將為異、

収氣之時稍似難。俗間大有同名姓、相似顔容幾百般。形容大省

□□□□ □□□□ □□□□ □□□□ □□□□ □□□□ □□□□ □□□□

収氣之時稍似難。俗間大有同名姓、相似顔容幾百般。形容大省  
収氣之時稍似難。俗間多有同名姓、相似顔容幾百般。形容大省

繪相織、只竟思量沒處安。闍梨苦死來相認、更說家徒事意看。  
□□□□ □□□□ □□□□ □□□□ □□□□ □□□□ □□□□ □□□□

繪相織、只鏡思量沒處安。闍梨苦死來相認、更說家徒事意看。  
曾相識、只竟思量沒處安。闍梨苦死來相認、更說家中事意看。」

### 【現代語訳】

口を開いて申します。「あなたはご存じでしょうか、私は南閻浮提の者で、幼い時に両親を亡くしました。家は裕福ですが子孫はなく、権勢のある家でもありません。私の母は清提と申し、父は輔相という名です。一生に多くの善行を積み、亡くなってこの天上に転生するこ

とになっているはずで。めでたきかな富貴驕奢の地、のぞみ見れば心はのんびりと心地よい。鐘や太鼓はしゃんしゃんと雅な楽の音を合わせ、瑟を奏でる音も高らか。切ない苦労は長く忘れず、育てていただいたご恩は忘れられません。別れた後も元気で変わりなくおられるかどうか、最近ここへ訪ねてきたのです。」長者はその言葉を聞くと思い当たるところあって悲しみ、心の内で言葉が混乱してうまく出てきません。「私には閻浮に息子が一人おりますが、出家の子かどうかよく分かりません。あなたは私が詳しく尋ねるのを変に思わないでください。世の中の人と人との秩序はさまざまです。ちょっと見ただけでものを言うのはよろしくありませんが、言いたいのを我慢する時はいささか難しいようです。世の中には同じ姓名の人は大勢いて、同じ顔の人も何百人もいます。姿をよく見てみるとかつての知り合いのようですが、最後まで確信が持てません。あなたがどうしても親子の名乗りをしようと言うのなら、もっと家族のことを話してみてください。」

### 【注】

(一) 頻道：P.3485(乙)・P.4088(丁)は「貧道」と表記する。僧や道士の謙称。宋の葉夢得『避暑錄話』巻下に、「晉宋間、佛學初行、其徒猶未有僧稱、通曰道人……貧道亦是當時儀制定以自名之辭、不得不稱者、疑示尊禮、許其不名云耳。今乃反以名相呼而不諱。蓋自唐已然、而貧道之言廢矣（晉から宋の間、仏教の学問が初めて行われたが、その学徒はまだ僧称がなく、すべて道人と言っていた。……「貧道」も

また当時の儀制において、自分を指す言葉として定めた語であった。名乗らぬ訳にいかないものは、尊重していることを示すために、名を言わずにすまずことを許したというまでのことではないかと思われる。今は逆に名を呼んで諱むことがない。どうやら唐代にはそうだったようで、「貧道」の語は廢れたのである」とあり、唐以降は僧の間では廢れたという。

(一) 南閻浮提：閻浮提は梵語 Jam-bu-dvīpa の音写。閻浮 (Janbu) 樹が繁茂する島 (dvīpa、提波)。我々の住む世界。仏教の宇宙観によると、宇宙の中心に須弥山があり、その南に我々の住む島 (洲) があるが、その形は南の辺が短い台形であるというから、インド亜大陸を反映しているであろう。閻浮洲・瞻部洲、また南方にあることから南閻浮提・南閻浮・南瞻部洲とも呼ぶ。『大唐西域記』卷一に、「蘇迷盧山 (注：唐言妙高山。舊曰須彌、又曰須彌婁皆訛略也) 四寶合成、在大海中。……海中可居者、大略有四洲焉。東毘提訶 (注略・南瞻部洲 (注：舊曰閻浮提洲、又曰剌浮洲、訛也) (スメール山 (注：唐には妙高山という。旧くは須彌といい、また須彌婁ともいう。みな訛りや略である) は四宝から作られており、大海の中にある。……海の中で人が住めるところは、およそ四洲ある。東のヴィデーハ (注は省略)、南のジャンブ洲 (旧くは閻浮提といい、また剌浮洲ともいう。訛りである) とある。

(二) 孤嫖：「嫖」は「𡗗」または「嫖」の俗字と思われる。P.4988 (一) は「瓊」とするが、『廣韻』ではともに平聲下十二庚「梁營切」と同音であり、音通で用いられているかと思われる。孤独、孤独な人。唐・

張説「諫幸三陽宮表」(『張説集校注』〔中華書局二〇一三年〕卷二七) に「孤嫖老疾、流轉衢巷 (孤兒や身寄りのない人や老人や病人は、ちまたを彷徨っています)」とある。

(四) 途當：『校注』は項楚校が「途」を「徒」とすべきだとするのに対し「逢」ではないかと述べているが、北宋・胡宿の「吳興秋晚郡齋長句」(『文恭集』卷六) に「分從高閣東、敢避要途當 (放置されても自分の運命とあきらめるまでのこと、権力者になるのはごめんこうむる)」とあるように、ここでは権力者の意味の「當途」(「當塗」とも表記する) を韻を踏むために前後を入れ替えているものと思われる。

(五) 阿耶名輔相：「耶」は「爺」の通用字。『維摩經疏』卷第三「弟子品」に「目連是姓字拘律陀。……是王舍城輔相之子 (目連は姓名を拘律陀といった。……王舍城輔相の子である)」とあり、一般的に「輔相」は宰相や大臣をさし、『維摩經疏』の記述もそうした意味である可能性が高そうに思われるが、その後固有名詞と誤解されて定着したのではないかと推定される。後世の目連救母の物語では、「傳相」という名とされる。

(六) 福田：「福德 (功德・善行) を生み出す田、幸福を育てる田地の意。人々が功德を植える場所」(『広説』)。『大唐西域記』卷八に「誠願大王福田爲意、於諸印度建立伽藍、旣旌聖跡、又擅高名、福資先王、恩及後嗣 (大王におかれましては、善行を積むことを目的として印度のあらゆる場所に伽藍を立ててくださいるようお願い申し上げます。聖跡を顕彰することになる上に、王の名を高からしめることになり、先王の追善にもなり、その恩恵は御子孫にも及ぶでしょう)」という例が

ある。

(七)可連富貴嬌奢地：「可連」は『校注』が「可憐」とするのにならい、「愛  
でるべき」という意味に解釈する。「驕奢」はS2614(原)は「嬌」、P3485  
(乙)は「驕」、P4988(丁)は「嬌」と表記するが、いずれも通用する。  
(八)望靚：P3485(乙)は「望都」とする。字形も類似しており、通用  
字として使用しているか。

(九)鐘鼓鏗鎗知雅音：「鏗鎗」は、『漢書』(中華書局一九六二年)卷  
二二「禮樂志二」に「但能紀其鏗鎗鼓舞、而不能言其義(ただその  
鏗鎗鼓舞を記すことができるだけで、その義を言うことはできない)」  
とあり、顔師古の注に「鏗鎗、金石之聲也(鏗鎗は金石の音である)」  
と見えるように、金石の打ちあたる美しい音を言う。P4988(丁)が「鎗  
鏗」とするのは前後を誤ったものと思われる。「雅音」は『宋書』(中  
華書局一九七四年)卷一九「樂志二」に「魏文侯雖好古、然猶昏睡於  
古樂、於是淫聲熾而雅音廢矣(魏の文侯は古いものを好んだが、それ  
でもやはり古樂にはぐっすり眠ってしまった。そこで、みだらな音楽  
が盛んになり、高級な音楽は廃れてしまったのである)」とあり、儒  
教的観点から見て高級な音楽のことをいう。

(一〇)鼓瑟：P4988(丁)は前の句の「鐘鼓」との重複を避けるためか  
「瑟琴」としてゐる。

(一一)哀々：『毛詩』小雅「蓼莪」に「蓼蓼者莪、匪我伊蒿。哀哀父母、  
生我劬勞(柔らかく伸びた蓬、蓬から雑草に変わってしまった。哀し  
いかな父母、私を生んで苦しまれた)」とあるのを踏まえる。

(一二)可安：P3485(乙)・P4988(丁)は「可安」と表記するが、「安」

と「安」は『廣韻』去聲四十一漾「巫放切」であり、音通で用いられ  
ていると思われる。

(一三)別後安和好在否：P4988(丁)は「別後(別れた後)」を「別久  
(別れてからずっと)」とする。「好在」は杜甫「送蔡希魯都尉還隴右  
因寄高三十五書記」詩(『杜詩詳注』卷二三八)に「因君問消息、好  
在阮元瑜(あなたに頼んで消息を問うた。阮元瑜は元氣だろうか、と)」  
とあるように、お元氣かどうか、という意味で多く挨拶に使われる。  
(一四)聞語：P3485(乙)・P4988(丁)は「聞言」とするが、どちらも「言  
葉を聞いて」という意味になると思われる。

(一五)乍觀出語為將異：P3485(乙)・P4988(丁)は「將為異」とし、  
語順としてはこちらが正しいと思われる。『校注』では蔣禮鴻に従い  
「異」を「易」と解釈し、「降魔變文」(この部分は「敦煌寶藏」等に  
は収められていないため、本文は『校注』に従う)「出言易於返掌、  
収氣難於拔山(ものを言うのは掌を返すようにたやすいが、言いた  
いのを我慢するのは山を抜くように難しい)」を根拠とする。この成語  
を踏まえるとすれば、「ちよつと見ただけでもを言うのは簡単なこ  
とですが」という意味になり、次の句「収氣之時稍似難(言いたい  
のを我慢する時はいささか難しいようです)」との整合性が取れる。ただ、  
「異」のままでも「ちよつと見ただけでもを言うのはよろしくあり  
ませんが」という意味に取ることは可能である。ここでは原文を尊重  
して、仮に後者で訳す。

(一六)偕間大有同名姓：S2614(原)の「偕」は「俗」の俗字。P4988(丁)  
は「大」を「多」とする。





連認得慈父、起居問訊已了。×「慈母今在何方受於快樂。」長者報言  
連認得慈父、起居問訊已了。×「慈母今在何方受於快樂。」長者報言  
連認得慈父、起居問訊已了。問「在何方受於快樂。」長者報言  
慈母今

羅下、母汝生存在日、与我行業不同。我修十善五戒、死後神識  
羅下、「×汝母生存在日、与我行業不同。我十善五戒、死後神識  
羅下、「×汝母生存在日、与我行業不同。我修十善五戒、死後神識  
××、「×汝母同。我脩五戒十善、××××  
母×生存在日、共我行業不

得×天上。汝母平生在日、廣造諸諸之罪、命終之後、遂墮地獄。汝向  
得生天上。汝母平生在日、廣造之××罪、終命之後、遂墮地獄。汝向  
得×天上。汝母平生在日、廣造諸××罪、命終之後、遂墮地獄。汝向  
得生天上。汝母之後、遂墮地獄。汝向  
母生存在日、廣造諸××罪、命終

×閻浮提<sup>(一)</sup>×冥路之中、尋問阿孃、即知去處。」目連問語、便辭長者、  
×閻浮提×冥路之中、尋問阿孃、××××××××××××××××××××××××  
南閻×提向名路之中、尋問阿孃、即知去處。」目連問語、便辭長者、  
南閻浮  
目連問語、便辭長者、  
浮提×冥路之中、尋覓阿孃、即知去處。」  
者、

頓<sup>(二)</sup>身下降南閻浮提、向冥路之中、尋覓阿孃不見<sup>(三)</sup>×。且見八九×箇男子  
×下天來×××  
鞞身×降南閻浮提、向冥路之中、尋覓阿孃不見×。且見八九×箇男子  
  
頓身下降南閻浮提、向冥路之中、尋覓阿孃路。且見八九千箇男子

女人、閑、無事。目連向前問其事由之處。  
女人、閑、無事。目連向前問其事由之處。  
女人、閑、無事。目連向前問其事由之處。  
女人、閑、無事。目連向前問其事由之處。  
  
女人、閑、無事。目連向前問其事由之處。

【現代語訳】

目連は長者に申しました、「拙僧は幼いころ名を羅下と申しました。  
父母を亡くした後、仏の所へ身を投じて出家し、剃髪して、号を大目  
乾連といい、神通力では第一位となりました。」長者は幼名を聞くと、  
すぐにこれが息子であるとわかりました。「別れて久しいが、無事で  
あったか。」羅下目連は父親とわかると、ご機嫌伺いのあいさつを終  
えました。「母上は今どこで快樂を享受しているのでしょうか。」長者は  
羅下に答えて言いました、「おまえの母は生きていた時、わしとは品  
行が違ったのじゃ。わしは十善五戒を修養し、死後魂は天上に生まれ  
変わる事ができた。おまえの母は生きていた時、あれこれと諸々の  
罪を犯し、命果てた後、かくて地獄へ堕ちたのじゃ。おまえは閻浮

提の黄泉路の内で、母様を探し訪ねれば、すぐに行き先がわかるう。」目連は話を聞くと、すぐに長者に別れを告げ、お辞儀をして南海の閻浮提へ降り、黄泉路の内で、母様を探し訪ねましたが会えません。ちょうど八、九人の男女がぶらぶらしているのに出会いました。目連が前の方に向かってその由来を尋ねる場面です。

【注】

(一)已後…以後に同じ。

(二)大目軋坤（音）：S2614(原)に「坤」字があるのは、「乾」字につられて「乾坤(天地)」の語を連想したことによる誤りであろう。

(三)弟：S2614(原)の「弟」は「第」と音通字(『廣韻』卷四去声「十二霽」、第・弟とも特計の切)。

(四)好在已否：「已否」は敦煌變文で頻用される疑問語氣詞で、以否・已不・以不に同じ。「廬山遠公話」(S2073)、「相公問遠公曰、昨夜念經是汝已否。遠公曰、是賤奴念經之聲(宰相閣下は遠公に問うて言った、昨夜誦經していたのはおまえか。遠公は言った、私めの誦經の声ではないか)」。『後漢書』(中華書局一九六五年)列傳七「岑彭傳」、「大長秋以朔望問太夫人起(大長秋は一日と十五日に岑彭の母に伺機嫌伺いをするところとした)」。S2614(原)とP3485(乙)の「信」は「訊」と音通字(『廣韻』卷四去声「二十一震」、信・訊とも息音の切)。「問訊」は僧尼が合掌してあいさつすること。東晉の法顯の『佛國記』に「阿那律以天眼遙見世尊、即語尊者

大目連、汝可往問訊世尊。目連即往、頭面禮足、共相問訊(阿那律は天眼にて遙かに世尊が天から下られたのを見て、すぐに尊者大目連に言った。「世尊に伺あいさつしに行け。」目連はすぐに行くと、頭を地に着けて足をいただき、ごあいさつした)と見える。

(六)母：S2614(原)は「母」の上に一字あるが判読不能。

(七)行業…おこない、ふるまい。身口意(身体・言語・心意)の所作。

(八)十善五戒…十善は前出。〔注〕(五)「十善」参照。五戒は在俗信者の保つべき五つの戒め。一般的には不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒をいう(『弘明集』(四部叢刊所収明汪道昆本)卷一三に録す東晉の郗超「奉法要」は不殺・不盜・不姪・不欺・不飲酒を挙げる)。

(九)神識…靈魂。目連救母説話を題材とする敦煌出土『孟蘭盆經講經文』(『校注』に所收)に「直爲亡來年歲久、不知神識落何方(亡者となつてからというもの長年経っており、靈魂がどこへ抜け落ちたか分からない)」、また「伍子胥變文」(S328)に「念君神識逐波濤、遊魂散漫隨荊棘(思えば君のたましいは波のまにまに漂い、さまざまみたまは荊にまとう)」等の用例がある。

(一〇)廣造諸諸罪：S2614(原)二つ目の「諸」字は上から消されているように見える(墨が滲んでいるだけの可能性もある)。その右横の小字は判読困難であるが「之(の)」と翻字した。P2319(甲)「廣造之罪」の「之」字は「の」と解釈すると文脈が通らないため、敦煌變文で常用される「諸」の通字とみなすべきであろう。

(一一)閻浮提：「閻浮提」は前出。〔注〕(二)「南閻浮提」参照。P3485(乙)の「南閻提」という略称は珍しく、用例は阿叔『妙印鈔』卷八に



却歸迴。早被妻兒送墳墓、獨自拋我在荒郊。四伴更無親伴侶、却歸迴。早被妻兒送墳墓、獨自拋我在荒郊。四伴更無親伴侶、

狐狼鴟鵂競分張。宅舍破壞无投處、王邊披訴語聲哀。判放作鬼閉

×××××××× ×××××××× ×××××××× ××××××××

狐狼鴟鵂競分張。宅舍破壞無投處、王邊披訴語聲哀。判放作鬼閉

狐狼鴟鵂競分張。宅舍破壞无投寄、王邊被訴語聲哀。判放作鬼閉

無事、受其餘報更何哉。死生路今而已隔、一掩泉門不再開。塚上

×× ×××××××× ×××××××× ×××××××× ××××××××

無事、受其餘報更何哉。死生路今而已隔、一掩泉門不再開。塚上

無事、受其餘報更何哉。生死路今而已隔、一掩泉門不再開。塚上

縱有千般食、何曾濟得腹中飢。嗚咷大哭終无益、徒煩攪紙作錢財。

×××××× ×××××××× 嗚咷大哭終无益、××××××××

雖有千般食、何曾祭得腹中飢。嗚咷大哭於無益、徒煩攪紙作錢財。

縱有千般食、何曾祭得腹中飢。号挑大哭終无益、徒煩攪紙作錢財。

寄語家中男女道、勸令脩福救冥灾。」

寄語家中男女道、勸令修福救冥灾。」云々

寄語家中男女道、勸令修福救冥灾。」

寄語家中男女道、勸令脩福救冥灾。」

【現代語訳】

「どうかひとまず拝礼はなさらないで下さい、あなた方は何者ですか、ここにみなで集まって。ぶらぶらと何もすることなく、城郭の外へ遊びに来て。拙僧は今朝ここへやって来たところでした、心中まことに深く不思議がっております。」

人々は和尚に答えて申しました、

「ただ同名のうへ同姓であるために、名前が行き違つて捕まえられて来たんです。取り調べられることちようど三、五日を経て、何事も無く釈放されて帰されました。(しかし)とつくに女房によつて墓へ送られ、一人で郊外の荒地に抛たれちまっています。周りには親も伴侶もおりやせず、狐と狼、烏と鴟が争つて(屍を)分けて持つて行きます。肉体は壊れて身を寄せる所もございませんと、閻羅王の所で陳訴するに語気は悲哀を帯びておりました。無罪放免となつたとて亡者となつてはやることもなく、それ以上の報いを受けるならば更にどんなことがありましょう。死の世界と生の世界との道は今や隔たり、黄泉の門を押ししてみても再び開くことはありません。(残された人々が)墓の上にたとえ各種各様の供え物をしてくれても、(私の)腹中の飢えの足しになることができましようか。大声で泣き叫んでくれたところで結局何の役にも立たぬ、いたずらに面倒をかけて紙で金や財物を作つてもらつちまつて。(現世にいる私の)うちの息子・娘に言付けて下さい、善行を積んで(私の)あの世での災難を救うようにと勧めて下さい。」

【注】

(一六)但且：「但」ここでは懇願・要請を表す。「舜子變」(P2721)、「(老母)云、汝莫歸家、但取你親阿娘墳墓去。必合見阿嬢現身(老母は)言った、おまえさん家に帰らずに、実のお母さんのお墓へ行きなされ。きつとお母さんの現し身に会えるはずじゃ」。「且」はしばらく、とりあえずの意。ちなみに杏雨羽019Vは「但且」を「檀越だんおつ(梵語 danapati の音写。施主の意)」と作る。

(一七)この段の韻文が奇数句であるために、項楚校は韻文の前に脱落句があるはずと言うが、韻文の唱い始めが三句単位になるのは敦煌変文によく見られるパターンであり、当時通行していた説唱形式かと思われる。

(一八)賢者：通常は立派な人物を指す語である。ここでは仏典にしばしば見られる、修行僧が用いる互いへの呼びかけの語として使われているか(梵語 *ayusumat* に相当)。三國吳・支謙訳『大明度經』卷一、「善業曰、善哉善哉、賢者、勸助爲説是致要語(善行が言った、善き哉善き哉、友よ、鼓舞する説法をなすことは重要な言葉です)」。

(一九)城塚：S2614(原)と杏雨羽019Vの「塚」字は宋・丁度ら撰『集韻』卷一〇人声下「釋第一九」に「塚塚曠、説文、度也」とある。「度(測る)」の意はここでは文意にそぐわないが、梁・顧野王撰『玉篇』卷二「塚部第一九」に「塚、古獲切。説文云、度(測る)也。……今作郭」とあるから、塚も郭に通じるのであろう。P3485(乙)の「槨(棺の外箱)」は誤字と思われる。

(二〇)來：項楚校は、「來」は句首にあるべき、即ち「來遊城塚外」

とするのが正しく、この段は「拜」・「會」・「外」・「恠」字で韻を踏むと言う。但し、平水韻では「拜」・「恠」が去声十掛韻、「會」・「外」が去声九泰韻であるから、厳密に言えば韻を踏んでいるとは言い難い。ちなみに「來」は上平声十灰韻である。

(二一)只手：まことに。音通により「只手」・「只守」・「祇守」とも表記される。例えば『妙法蓮華經講經文』(P2305)に「若是世間七寶、只首交汝難求、可能捨得已身、与我充爲高座(もしも世間の七宝(金・銀・瑪瑙など七つの宝物)が、まことにおまえに探し求めさせ難ければ、己の身を捨てて、私のために高座となれるか)」とある。

(二二)尚(尚)當(當)：P2319(甲)は「尚」字を「當」と誤り、右横に誤字を示す記号「ト」を記した上で、右上に小字で「尚」を補う。

(二三)名字交錯被追來：死者と同姓同名のために誤って冥途へ連れて行かれるという説話は、『太平廣記』のような奇聞・異聞集にしばしば見られるパターンの一種である。宋・李昉ら編『太平廣記』卷九〇九「釋證一、惠凝」の「元魏時、洛中崇眞寺有比丘惠凝、死七日還活。云、閻羅王檢閱、以錯名放免(北魏の時、都洛陽の崇眞寺に惠凝という僧がおり、死後七日目に生き返った。言うことには、閻羅王が検閲したところ、名前の取り違えであったため放免となったのだと)」など。中国における民間信仰である。

(二四)勸當：取り調べること。唐の劉肅の『大唐新語』(中華書局一九八四年)卷四「持法」に「崔宣反狀分明、汝寬縱之。我令(來)俊臣勸當。汝無自悔(崔宣が反逆しようとしたことは明白なのに、おまえは許してやろうというのか。私は(來)俊臣に取り調べさせよう。

後悔するでないぞ」と見える。

(二五)却…却って、思いがけずの意で訳出したが、ここでは帰るという動詞として解釈することも可能である。

(二六)挽：S2614(原)のこの字を『敦煌變文集』は「挽」と翻字し(校記では何故か「尅」とする)、「抛」の俗字であると言うが、根拠が提示されていない。むしろ、「挽」字の右に誤字を示す「ト」記号が付されているように見える。「挽」であれば、引つ張る、或いは棺を引いて行くという意味であるから、文脈的にも整合性がある。後の校勘者が他テキストの「抛」字を見て「ト」記号を付したか。ちなみに、P3485(乙)と杏雨羽019Vも「抛」と翻字したものの、テキストの字が模糊としておりはつきり見えない。

(二七)荒祁：S2614(原)の「祁」は「郊」と字形が似ているための誤りであろう。P385(乙)「交」は音通による当て字。

(二八)四邊：周り。P3485(乙)と杏雨羽019Vは「四伴」と作る。「四伴」を「四辺」と同義で使う用例は少なく、唐以前には、この「目連變文」(S2614〔原〕等)にもう一例、「阿嬢恐被侵奪、舉眼連看四伴、左手鄣鉢、右手團食々(母は奪われるのを恐れて、眼を挙げて周りを見ながら、左手で鉢をさえぎり、右手で団子にして食べた)」とある以外には見当たらなかった。宋元期には、佚名『大唐三藏取經詩話』(古本小説集成所収宋刊本)下「到陝西王長者妻殺兒処第十七」に「癡那曰、母安我此一釜、變化蓮花座、四伴是冷水池、此中坐卧甚是安穩(癡那は言った、母上は私をこの一座の釜にお据えになりましたが、蓮華座に変わり、周りは冷水の池、この中で寝起きするのはたいへん平穩で

す)」、元の薩都刺「石夫人詩」(『雁門集』〔上海古籍出版社一九八二年〕卷一四)に「危危獨立向江濱、四伴無人水作隣(高き地に一人立ち河の水際に向かえば、周りに人はおらず河水と隣人〔友人〕になる)」といった用例が見える。

(二九)狐狼：P385(乙)は「孤郷」と作る。「孤」は「狐」の誤か。「郷」は字義不明。或いは「瑯(琅、即ち玉石)」と書いているのかもしれないが、テキストの字が模糊としており判読困難。どちらにせよ文意が通らない。「狼」の誤字と思われる。

(三〇)分張…分ける。「張」は「施(のばす)」と同義、つまり空間的に広げることを用いる(『玉篇』卷一七「弓部第二百五十八」に「張、陟良切。施弓弦也」、『廣韻』卷二平声下「十陽」に「張、陟良切。張施也」とある)。故に、分布する、離散する、分配する、分割するなど多義で用いられるが、ここでは獸たちが屍を「分けて方々へ持ち去る」の意であろう。梁・蕭子顯撰『南齊書』(中華書局一九七二年)卷三二列傳第一三「張岱傳」、「岱初作遺命、分張家財、封置箱中、家業張減、隨復改易、如此十數年(「張」岱は以前遺言して、家財を分割し、箱の中にしまい、家産が増減すると、時機に改めるよう言いつけており、このようにして十數年が過ぎた)」。

(三一)宅舍…本来は家宅を指すが、人間の靈魂の拠り所としての身体の喩えとしても用いる。唐・張鷟撰の筆記小説『朝野僉載』卷二に見える「餘杭人陸彦、夏月死、十餘日見王、云、命未盡、放歸。左右曰、宅舍亡壞不堪。時滄州人李談新來、其人合死。王曰、取談宅舍與之(余杭の人陸彦は、夏に死に、十數日して〔閻羅〕王に見えると、王は言っ

た、「寿命はまだ尽きていない。放免しろ。」側近の者が言った、「体は腐敗してしまっています。」時に滄州人の李談が新たにやって来て、その人は死ぬべき者であった。王は言った、「談の体をこやつに与えよ。」は類似の用例である。

〔三三〕D 无投處・杏雨羽 019V は「无投寄」と作る。「投寄」は手紙などを送るの意で常用されるが、ここではやはり「投処」と同じく身を投じるの意。唐僧玄奘撰述・弟子辨機編の旅行記『大唐西域記』卷一一「僧伽羅國」、「於是至父本國、國非家族、宗祀已滅、投寄邑人（そこで父の祖国へやって来たが、国は一族のものではなくなり、一族の祀りがすでに途絶えていたので、村人のもとへ身を寄せた）」。

〔三三〕D 披訴・訴えること。『北史』（中華書局一九七四年）卷四一「楊播傳」、「至州借人田、爲御史王基所劾除官爵、卒于家。子侃等停柩不葬、披訴積年（州に着いて人の田畑を借りて、御史の王基に弾劾されて官職爵位を剥奪され、家で死んだ。子の侃たちは柩を留めたまま葬らず、何年も訴え続けた）」。

〔三四〕判放・放免の判決がくだるの意。唐の長孫無忌ら撰『唐律疏議』（臺灣商務印書館一九八〇年）卷二「名例三」（疏）、「官司出入者、謂應斷還俗及苦使、官司判放、或不應還俗及苦使、官司枉入（「官司出入」とは、「被告の道士を」還俗・苦役と判決するべきなのに、役所が放免すること、或いは還俗・苦役とすべきではないのに、役所が真実に反して有罪にすることを言う）」。『太平廣記』卷一百八「報應七」「張政」、「僧與對坐曰、張政是某本宗弟子、被妄領來。王曰、待畧勘問。僧色怒、王判放去（僧は「張政」とともに「閻羅王に」対座して言っ

た、「張政はそれがしの宗派の信者で、妄りに連れられてきたのです。」〔閻羅〕王は言った、「しばし取り調べるのを待っておれ。」僧が怒り、王は放免とした」。

〔三五〕哉・感嘆詞として解釈したが、項楚校は普通の「災」字とみなすべきとする。

〔三六〕今而・項楚校はこれを「而今（今、現在の意で常用される）」と解釈すべきとする徐震堦校の読みを是とする。よって『校注』は「而今」と録す。しかし、原文の通り「今にして」と読むことも可能と思われる。また項楚校はこの語は句首にあるべき、即ち「而今死生路已隔」とするのが正しいと言いが、必ずしも倒置が必要とは思われない。

〔三七〕曾・P.385(乙)の「増」は「曾」と音通字（『廣韻』卷二平声「十七登」、増・曾ともに作勝の切）。

〔三八〕濟・救う、不足を補うの意。P.385(乙)と杏雨羽 019V は「祭（祀る、供える）」と作る。「濟」と「祭」は同音。どちらでも文意が通る。

〔三九〕號眺・大声をあげて泣くこと。「號」は「號」・「号」の異体字。P.385(乙)の「眺（飛び跳ねる）」はまた意味が通るが、杏雨羽 019V の「挑」は意味が通らず、音通による誤字と見られる。

〔四〇〕徒煩攪紙作錢財・「煩」「攪」はともに煩わすの意。紙錢（紙を錢の形に切ったもの）を作って死者のために祀る習慣があるが、それでは死者の魂は救われぬと言う。杏雨羽 019V は「攪紙」を「箭紙」と作る。矢の形をした紙錢が存在したかは不明。或いは「剪」と字形が似ており発音も近いことから（箭は去声、剪は上声だが）、「紙を切っ

てお金を作る」の意のつもりで誤写したのかもしれない。また杏雨羽019Vは「錢財」を「錢才」と作るが、「才」は音通による当て字。

(四)脩福しゆふく：幸福や利益などをもたらす善行を積むこと。また、死後の冥福を祈って法要を営むこと。

(井口)

6

《散文》

S.2614(原)：目連××××× 良久而言× 「識一青提夫人已否。」

P.2319(甲)：目連××××× 良久而言曰 「識一青提夫人已否。」

P.3285(乙)：××××× ××××× 良久而言× 「識一青提夫人已否。」

杏雨羽019V：目連聞語、慘然无色、良久而言× 「識一青提夫人已否。」

諸人荅言盡皆不識。目連又問、「閻羅大王(C)住在何處。即是閻羅大王門。」

諸人荅言盡皆不識。目連又問、「閻羅大王住在何處。××××××××」

諸人荅言盡皆不識。目連又問、「閻羅大王住在何處。××××××××」

諸人荅言盡皆不識。目連又問、「閻羅×王住在何處。××××××××」

諸人荅言「和尚、向北更行數步、遙見三重門樓、有千万箇壯士皆持

諸人荅言「和尚、向北更行數步、遙見三重門樓、有千万箇壯士皆持

諸人荅言「和尚、向北更行數步、遙見三重門樓、有千万箇壯士皆持

諸人荅言「和尚、向北更行數步、遙見三重門樓、有千万箇壯士皆持

刀棒、即是閻羅大王門。」目連聞語、向北更行數步××、即見三重

刀棒、即是閻羅大王門。」目連聞語、向北更行數步××、即見三重

刀棒、即是閻羅大王門。」目連問語、向北更行數步××、即見三重

刀棒、即是閻羅大王門。」目連聞語、向北即行數步之間、即見三重■、

門樓、有×××壯士駟無量罪人入來。目連×× 向前尋問阿娘不見、

門樓、有×××壯士駟無量罪人入來。目連×× 向前尋問阿娘不見、

門樓、有×××壯士駟無量罪人入來。目連×× 向前尋問阿娘不見、

門樓、有千万箇壯士駟無量罪人入□。目連聞語、向前尋問阿娘不見、

路傍大哭、了了前行、×披(D)所由將見於王。門官引入見大王、×問目連

路傍大哭、了了前行、×被所由將見於王。門官引入見大王、×問目連

路傍大哭、了了前行、×被所由將見於王。門官引入見大王、×問目連

路傍大哭、了了前行、乃被所由將見於王。門官引入見大王、×問目連

事×之處。××

事由之處。××

事×之處。××

行由之處。若為

【現代語訳】

目連はしばらくして申します。「青提夫人という人を知りませんか。」人々は皆知らないと答えました。目連はまたたずねて、「閻羅大王は



どこにお住まいですか。」人々は答えて、「和尚様、北へ更に数歩行くと、はるかに三重の門樓があり、何千何万の壮士が皆刀や棒を持っているのが見えます。それが閻羅大王の門です。」目連はこれ聞いて、北へ更に数歩行きますと、たちまち三重の門樓に、壮士らが数知れぬ罪人どもを追い込んで見えました。目連は進み出て母上のことをたずねましたが見つからず、路傍で大いに泣き、泣いては進みまして、役人に大王との謁見へ送られました。門番が連れて入りまして大王にお目通り、目連にわけをたずねる場面です。

【注】

(一) 閻羅大王…閻羅王、閻魔王とも。閻魔は梵語 Yama の音写。漢訳で「雙王」ともいう。古くは『リグ・ヴェーダ』に登場するインド古来の神で冥界の王。死後の世界を支配し亡者を裁く者として、『長阿含經』によれば十八の将官と八万の獄卒を従えるという。中国や日本では裁判官である十王の一人として、中国の風俗や道教の影響を受けている(『広説』)。

(二) 即是閻羅大王門…この一句は S2614(原)にのみある。文脈からいっても明らかにおかしく、次の諸人の台詞にある句を誤って書き写してしまったものであろう。

(三) 三重門樓…杏雨羽 019V では、「三重」と「門樓」の間に誤字を塗りつぶして修正したように見える箇所がある。

(四) 所由…担当の役人を意味する語で、所由官などを短縮した言い方。

『舊唐書』(中華書局一九七五年)巻二一「禮儀志一」に「大祀、所司

毎年預定日奏下。小祀、但移牒所由(大祀は、所管の役所が毎年あらかじめ日を定めて奏上し下命される。小祀は、ただ文書を担当官に送るのみである)」という。

(五) 若為…この箇所では、杏雨羽 019V にのみ見られる。この語は韻文を導く定型表現の一種と考えられる。[3注(七)]「若為」参照。「目連變文」に関しては、杏雨羽 019V には他にも二箇所「……之處、若為」の形を取った例が見られるのに対し、他本では P2388(丁)に一箇所見られるのみである。また杏雨羽 019V では、この散文部分の最初にも、「目連聞語、慘然无色(目連はその言葉を聞くと、慘然として色を失い)」と、他本にないつなぎの句が入っている。表現の整理・補充や、芸能の口調を写し取ったテクニカルチームが後期のテキストほど整備されるといったことは、明代白話文学に広く見られる。杏雨羽 019V もそれと同様に、読みものとして文面を整えようとする意図を持って、語句を補いつつ抄写されたテキストであったと考えられよう。

《唱》

S.2614(原)：大王既見目連入、合掌逡巡而欲立。「和尚 又沒事  
P.2319(甲)：大王既見目連入、合掌逡巡而欲立。「和尚 又沒事  
P.3485(乙)：大王既見目連入、合掌逡巡而欲立。「和尚 有沒事  
杏雨羽 019V：大王既見目連入、合掌逡巡而欲立。「和尚 有沒事

由來<sup>(六)</sup>」連忙案後相顧<sup>(七)</sup>。「慚愧闍梨至此問、弟子處在冥塗間、拷

由来。」連忙業後相祇挹、云々××××× ××××××× ×  
 由来。」連忙案上相祇邑。「慙愧闍梨至此間、弟子處在冥塗間、拷  
 由来。」連忙案後相祇邑。「漸愧闍梨至此間、弟子處在冥路間、考  
 定罪人×生死。雖然不識和尚、早箇知其名字。為當仏使至此間、  
 ××××××× ××××××× ××××××× ×××××××  
 定罪人×生死。雖然不識和尚、早箇知其名字。為當仏使至此間、  
 定罪人於生死。雖然不識和尚、早箇知其名字。為當仏使至此間、  
 別有家私事意。太山定罪孕難<sup>(一〇)移</sup>、惣是天曹地筆批。罪人業報隨<sup>縁</sup>  
 ××××××× ××××××× ××××××× ×××××××  
 別有家私事意。太山定罪孕難移、惣是<sup>槽</sup>地筆批。罪人業報隨縁  
 別有家私事意。太山定罪孕難餘、惣是天曹把<sup>筆</sup>批。罪人業報隨縁  
 起、造此<sup>(一〇)</sup>何人救得伊。腥血凝脂長夜梟、惡染闍梨淨清衣。冥塗不  
 ××××××× ××××××× ××××××× ×××××××  
 起、造此何人久得伊。腥血凝脂長夜梟、惡染闍梨清淨衣。冥塗可  
 處、造此誰能救德伊。腥血凝脂長梟、惡着闍梨清淨衣。冥除<sup>不</sup>  
 可多時住、伏願闍梨早去歸。」  
 ××××× ××××××××  
 不多時住、伏願闍梨早去歸。」  
 可多時住、伏願闍梨早却歸。」

【現代語訳】

大王は目連が入ってきたのに会い、合掌しかしこまって立ち上がる  
 うとする。「和尚様どんなわけで来られたか。」急ぎ机の向こうで拝礼  
 する。「阿闍梨がここへおいでとはありがたいこと。わたくしめは冥  
 界におり、罪人の輪廻を責め定めております。和尚様と面識はなくと  
 も、とうからお名は存じておりました。御仏の使者としてここへ来ら  
 れたか、他に私的なご用事がありましたか。泰山府君が罪を定めればも  
 や動かすことはありません、全て天地の官府が決裁すること。罪人の  
 因果応報は因縁によって起こるなれば、軽々に誰が救えるものであり  
 ましょうや。なまぐさい血と凝固した脂が闇夜に臭気を放ち、阿闍梨  
 の清浄な衣を汚してしまいます。冥界には長居するべきではありません  
 ん、どうぞ阿闍梨には早くお帰り下さるよう。」

【注】

(六)和尚又沒事由来：P.2319(甲)では「和尚」の後に何らかの字があ  
 るが、「没」字を誤って書いた後に修正したようである。その次をS.2614  
 (原)とP.2319(甲)は「又」に作るが、P.3485(乙)と杏雨羽019Vにあ  
 るように「有」ととるべきであろう。「没」は疑問代詞の用法。たと  
 えは「降魔變文」に「佛是誰家種族。先代有没家門。學道諮稟何人。  
 在身有何道德。(仏とはどの一族の者か。先祖はどのような家柄か。  
 道を学ぶのに誰に教わったのか。その身にどのような道德があるの  
 か)」「校注」という。

(七)即：P.2319(甲)以外は全て「邑」とするが、P.2319(甲)のとおり



×× ×××××××× ×××××××× ×××××××× ××

耶居、慈母滿天覓惣無。計亦不應過地獄、只恐黃天橫被誅。追放

耶居、慈母諸天覓惣无。計亦不應過地獄、只為黃天橫被誅。追方

縱由天地邊、悲嗟悔恨乃長嘯。業報若來過此界、大王繪久得知否。<sup>(一五)</sup>

×××××××××××××× ×××××××××× ××××××××

縱由天地邊、悲嗟悔恨乃長嘯。業報若來過此界、大王繪亦得知否。

縱由天地邊、悲嗟悔恨乃長呼。業報若來過此界、大王繪亦得知否。

【現代語訳】

目連は申し上げて「申しにくいことながら、大王にはご存じでしょうか。愚僧には現世で父母があり、日夜齋戒し常に断午をしております。現世でのそのおこないにより、死後は浄土に生まれるはずでした。天界にはただ父上しかおられず、母上は諸天を捜してもどこにもいません。思うにまた地獄に行かれたはずもなし、ただ天から思いの外に冤罪を受けられたのではあるまいか。あとを追って天地をあまねくたずねまわり、悲しみ悔やんで長嘆息いたします。因果応報でもしやここへ来ておられたら、大王にはご存じではないでしょうか。」

【注】

(一三) 日<sup>訓</sup>夜<sup>訓</sup>常<sup>訓</sup>業<sup>訓</sup>短午：「業」は「齋」の異体字。S.2614(原)のP.3485(7)は「短午」、杏雨羽019Vは「断午」と表記するが、『校注』のいうように「断午」、すなわち仏道修行において正午を過ぎてからは食事を

しないというきまりをいう。『菩薩受齋經』や『法苑珠林』卷九一などに「菩薩齋日有十戒。……第四菩薩齋日、過中以『法苑珠林』では「已」後不得復食(菩薩の齋日に十の戒めがある。……第四に菩薩の齋日には、正午を過ぎて以後は食事をとらない)」とある。

(一四) 黃天：項楚校にいうように「皇天」の音通。

(一五) 追放縱由天地邊：項楚校が「追放(杏雨羽019Vでは「追方」)は「追訪」、「縱由」は「蹤由」、「邊」は「遍」ととるべきというのに従う。また「縱由」は「たとえくであろうと」、「天地邊」は「天地の果て」と解釈して、「たとえ天地の果てまで訪ねよう」という意味である可能性もある。

(一六) 大王繪久得知否：「繪」は『校注』にいうとおり「曾」ととる。「久」は「亦」の異体字。(大賀)

7

《散文》

S.2614(原)：目連言訖、大王<sup>ト</sup>■<sup>ト</sup>喚× ××××上殿×、  
P.2319(甲)：目連言訖、大王×便喚× ××××上殿×、  
P.3485(7)：目連言訖、大王×便喚× ××××上殿×、  
杏雨羽019V：×××× 大王××喚言「和尚近前上殿来。」目連聞

× ×××× × 乃見地藏菩薩、便即礼拜。「汝覓阿孃<sup>ト</sup>来。」目連啓  
× ×××× × 乃見地藏菩薩、便即礼拜。「汝覓阿孃<sup>ト</sup>来。」目連啓

× × × × × 及乃見地藏菩薩、便即禮拜。「汝覓阿娘來。」目連啓語、便即上殿、×乃見地藏菩薩、便即禮拜。「汝覓阿誰來。」目連啓

言「××是覓阿娘來。」××××××××××「汝母生存在日、廣造諸罪、

言「××是覓阿娘來。」××××××××××「汝母生存在日、廣造諸罪、

言「××見覓可娘來。」××××××××××「汝母生存在日、廣造諸罪、

言「貧道×覓阿娘來。」地藏菩薩造言「汝母生存在日、廣造諸罪、

無量無邊、××××× 當墮地獄。汝且向前、吾當即至。」大王便喚業

无量无边、××××× 當墮地獄。汝且向前、吾當即至。」大王便喚業

無量無邊、××××× 墮地獄。汝且向前、五當即至。」大王便喚業

××××× 命終之後、當×地獄。汝且向前、吾當即至。」大王即喚業

官·伺命·司錄、應時即至。「×和尚阿娘、名青提夫人、亡後多少時。」

官·伺命·司錄、應時即至。「×和尚阿娘、名青提夫人、亡後多少時。」

官·伺令·伺錄、應時即至。「是和尚阿娘、名清提夫人、亡後多少時。」

官·伺命·伺錄、應時即至。「×和尚阿娘、名青提夫人、亡後多少時。」

業官啓言大王×、「青提夫人××已經三載、配罪案惣在天曹錄事司、

業官啓言大王×、「青提夫人已來已經三載、配罪案惣在天曹錄事司、

業官啓言大王×、「青提夫人亡來已經三載、配罪案惣在天曹錄事司、

業官啓×大王言、「青提夫人亡來已經三載、配罪案惣在天曹錄事司、

太山都尉一本。」×王喚善惡二童子向太山檢青提夫人在何地獄。大王

太山都尉一本。」×王喚善惡二童子向太山檢青提夫人在何地獄。大王

太山都尉一本。」×王喚善惡二童子向太山檢青提夫人在何地獄。大王

太山都尉一×。」大王喚善惡二童子向太山檢青提夫人在何地獄。大王

啓言和×尚、「共童子相隨、問五道將軍、應知去處。」目連聞語、便

啓言和×尚、「共童子相隨、問五道將軍、應知去處。」目連聞語、便

報言和×尚、「共童子相隨、問五道將軍、應知去處。」目連聞語、便

辭大王即出。行經數步、即至柰河之上。見無數罪人、脫衣掛在樹上、

辭大王即出。行經數步、即至柰河之上。見無數罪人、脫衣掛在樹上、

辭大王即出。行經數步、即至柰河之上。見無數罪人、脫衣掛在樹上、

辭×王即去。行經數步、即至柰河之上。見無數罪人、脫衣掛在樹上、

大哭數聲、欲過不過、迴迴惶惶、五三三三、抱頭啼哭。目連問其事由

大哭數聲、欲過不過、迴迴惶惶、五三三三、抱頭啼哭。目連問其事由

大哭數聲、欲過不過、迴迴惶惶、五三三三、抱頭啼哭。目連問其事由

大哭數聲、欲過不過、迴迴惶惶、五三三三、抱頭啼哭。目連問其事由

大哭數聲、欲過不過、迴迴惶惶、五三三三、抱頭啼哭。目連問其事由

之處。××

之處。××

之處。××

之處。若爲

【現代語訳】

目連が言い終わりますと、大王はすぐに殿上に呼び上げました。そこで地藏菩薩にお目にかかりましたので、すぐさま礼拝いたします。「おまえは母を探しに来たのか。」目連が申します。「母を探しに参りました。」「おまえの母は生前あまたの罪を犯すこと限りなかりしゆえに、地獄に墮ちたはずじゃ。とりあえず先に行つておれ。わしもすぐにまいる。」大王が早速業官・司命・司録を呼びますと、ただちにまいました。「この和尚様の母上の名は青提夫人という。亡くなつてどれほどになる。」業官が大王に申し上げます。「青提夫人は亡くなつてからすでに三年になります。配流に関わる内容はすべて天曹録事司泰山都尉の文書にあります。」王は善悪二童子を呼んで、泰山で青提夫人がどの地獄にいるかを調べさせました。大王が和尚に申し上げます。「童子について、五道將軍のところ尋ねられれば、行き先がわかりましょう。」目連はそれを聞くと、すぐさま大王に別れて出ました。数歩行くと、すぐに奈河のほとりに着きました。見れば無数の罪人が、衣を脱いで木に掛け、大声でしばし泣いて、渡ろうにも渡れず、おろおろと、三々五々、頭を抱えて泣いております。目連がそのいわれを聞く場面でございます。

【注】

(一)目連言訖……杏雨羽019Vはこの部分の本文が大幅に異なる。

「目連言訖」といううたからセリフに移行する標識らしき句を削除し、大王のセリフを受けて宮殿に上がるという形で合理化している。前と同様、藝能のテキストから脱皮し、読み物としてわかりやすくなる方向に書き換えたものか。

(二)阿嬢…杏雨羽019Vは「阿誰」とする。この語は人について尋ねる疑問詞。『三國志』（中華書局一九五九年）卷三七「龐統傳」に「先主謂曰、向者之論、阿誰爲失（先主が言った。「さきの議論は、誰が悪かったのかな）」と見えるように、古くから口頭語で用いられていた語で、後文にも出るように、敦煌変文にも用例が多い。問と答で「阿嬢」が反復されるのが不自然と考えて改めたものか。

(三)造言…杏雨羽019Vのみに見える語。通常『周禮』「大司徒」に八刑の一つとして「七曰、造言之刑」とあるように、流言をこしらえることを意味するが、ここでは通らない。『祖堂集』卷七「雪峰和尚」に「師當時不造聲（師はその時ものを言われなかった）」とある点から考えて、言葉を出すことか。ここも目連のセリフにそのまま続いていた地藏菩薩のセリフの話者を明示するもので、読み物用の改変と思われる。

(四)汝母生存在日、廣造諸罪、無量無邊、當墮地獄…杏雨羽019Vは「汝母生存在日、廣造諸罪、命終之後、當地獄」。「生存在日、廣造諸罪、無量無邊」の四字句三句を「當墮地獄」一句で受けるのはバランスが悪いと考えて、二句単位で意味をなすように改めたか。「墮」がないのは単なる脱字であろう。

(五)業官…業をつかさどる官ということであろうが、他の文献に例を

見出すことができない。

(六) 伺命…通常は「司命」と表記されるが、『法苑珠林』卷七八「祭祀篇 感應縁」に「唐兗州曲阜人倪氏買得妻皇甫氏、爲有疾病、祈禱泰山、稍得瘳愈、因被冥道使爲伺命。每被使即死、經一二日事了以後還復如故(唐の兗州曲阜の人倪買得の妻皇甫氏は、病氣になったので、泰山に祈禱したところ、少しよくなったが、それをきっかけに冥道から伺命として用いられるようになった。用いられる時はいつもすぐに死ぬが、一、二日たつて仕事が終わるとまたもとのようになるのである)」とある。ここでいう「伺命」は、死者の魂を連れて行くことを業務としており、この表記にふさわしい職務といつてよい。「司命」自体は、『楚辭』「九歌」に「大司命」があるように、非常に古くからある神であり、また星の名でもあるが、ここで登場するのは閻魔大王の側に控える属官であり、そのような上級神ではないように思われる。『東京夢華録』(『東京夢華録箋注』(中華書局二〇〇六年)卷一〇「十二月」に、二十四日の行事として「以酒糟塗抹竈門、謂之醉司命(酒粕をかまどの口に塗る。これを「醉司命」と呼ぶ)とあり、これが竈神にして司命(『三教源流搜神大全』には「竈神司命」という神が見える)である神を酔わせて天に一年の悪事を報告させないことを目指す行事であることから考えると、「命を伺う」という理解がかなり広がったように思われる。単なる誤字ではないであろう。なおP348(乙)は「伺令」に見えるが、これは字形の類似による誤り、もしくは「命」が不分明でこのように見えるだけであろう。

(七) 司録…司録參軍事は唐代の府・州などに広く置かれた属官で、名

称が録事參軍事と入れ替えられることが多い(宋代以降は録事に統一される)。文書などを管轄する業務で、ここに登場するのにふさわしいが、星や神の名として「司命」と並称されるのは財運を司る「司録」であり、ここでは両者が混同されている可能性がある。P348(乙)と杏雨羽019Vが「伺録」とするのは、「伺命」に引かれて誤ったものか。

(八) 是…P348(乙)のみこの字があるが、衍字か。

(九) 啓大王言…杏雨羽019Vのみ「啓言大王」を「啓大王言」とする。「啓言」はこれまでもたびたび見えたように、敦煌変文では発話を導く際にごく普通に用いられる語だが、文言においてこのような形で用いられることはなく、「啓」を動詞として使用する場合は直後に目的語が来るのが一般的である。杏雨羽019Vは、読んだ場合違和感がない方向に書き換えたものと思われる。

(一〇) 司事(録事司)…『南史』(中華書局一九七五年)卷三七「沈慶之傳」に「僧昭、別名法朗、……自云爲泰山録事、幽司中有所收録、必僧昭署名(僧昭、別名法朗。……自分で泰山録事になり、幽司が人を連れて行く時には、必ず僧昭が署名すると言っていた)」とあり、『法苑珠林』卷四五「興福篇 觀施部」に、王懷智という人物が顯慶(六五六～六六〇)初年に亡くなり、その後一度死んで生き返った者が「於地下見懷智云見任泰山録事(地下で王懷智に会うと、今泰山録事の任にあると言っていた)」と見える。泰山は古來死後魂の赴くところと認識されており、ここでいう「録事司」はこの「泰山録事」の役所に当たるものと思われる。

(一一) 太山都尉…「泰(太)山都尉」という官職は後漢に実在した。『後

漢書』卷七「桓帝紀」に「秋七月、初置太山琅邪都尉官……五月壬申、罷太山都尉官（永壽元年（一五五））秋七月、太山琅邪都尉の官を創設した。……（八年）五月壬申、太山都尉の官を廢止した」とあり、元來は泰山付近で発生した叛乱に対処するための官であった。有名な漢碑「孔宙碑」に孔宙の肩書きとして見えることで知られるが、実はそれ以前にも設置されていたことは顧炎武『日知録』（臺灣商務印書館一九七八年）卷三一「泰山都尉」で論じられている通りである。ここで言うのは無論実在の官職ではないが、泰山が死者の行き先と認識されていたことから、その管理者として後漢に実在した官名が使用されるようになっていたものと思われる。

(二二)一本「本」は文書や書籍を数える量詞。ここでは、例えば五代後唐の明宗により發布された「令選人先納三代親族狀勅」（『全唐文新編』（吉林文史出版社二〇〇〇年）卷一〇一）に「先於南曹印署納、吏部中書門下三庫各一本（まず南曹〔吏部の文書保管部局〕に署名捺印して納め、吏部・中書・門下の三庫にもそれぞれ一部を納めよ）」とあるように、公文書のことであろう。

(二三)善惡二童子：「董永變文」（S2204）に「好事惡事皆抄録、善惡童子每抄將（良いことも悪いこともみな書き写す、善惡童子がいつも書く）」とあり、「唐太宗入冥記」（S2630）にも善童子の名が見える。

(二四)五道將軍：『太平廣記』卷三〇四「神十四」「王籍」に、王籍の奴僕が死んで生き返り、地下で吏に「今見召汝郎作五道將軍（今おまえの家の若様を召して五道將軍に任ずる）」と言われたと語り、数日後大部隊が迎えに来て、王籍は死んだとあり、同じく卷三六一「妖怪

三」の「崔季舒」には北齊の崔季舒の妻が昼寝をしていると「見一神人、身長丈餘、偏體黑毛、前來逼己。巫曰、此是五道將軍、入宅者不祥也（神人を見た。身長一丈あまり、全身に黒い毛が生え、進んで迫ってきた。シャーマンが言うには、「これは五道將軍で、家に入ると不吉です）」とあり、不吉なものであったらしい。また同じく卷二七八「夢三」の「薛義」には、夢に出た「神人」が伝える病を追い払う呪文に「六丁使者、五道將軍、收汝精氣、攝汝神魂（六丁使者と五道將軍が、おまえの精氣を吸い、おまえの魂を捕らえるぞ）」とあり、天の使いである「六丁」とともに病を追う存在でもある。『三教源流搜神大全』には「五盜將軍」として、南朝宋の五人の盜賊が神となったものをあげる。この点について、山口建治「五道神と武塔神」（『人文学研究所報』四九（神奈川大学人文学研究所二〇一三年三月））は、三國吳以降に翻譯された仏典に見える五道大神が、五道將軍とも呼ばれるようになったと論じている。

(二五)奈河：地獄を流れる河。『佛說大乘莊嚴寶王經』卷二に「命終之後、見大奈河膿血盈流（命果てし後、大奈河に膿と血が満ち流れるのが見える）」とあるが、仏典の例は意外に少ない。『太平廣記』卷三四六「鬼三十一」「董觀」に「行十餘里、一水廣不數尺、流而西南。觀問習、習曰、此俗所謂奈河。其源出於地府耳。觀即視其水皆血而腥穢、不可近。又見岸上有冠帶袴襦凡數百。習曰、此逝者之衣。由此趨冥道耳（十餘里行くと、幅数尺に満たない河が西南に流れていた。董觀が靈習にたずねると、靈習が言うには、「これは俗に言う奈河です。董觀が靈習にたずねると、靈習が言うには、「これは俗に言う奈河です。地府から流れ出ているというだけのことです。）」董觀が近づいてみ





水北邊。水裏之人眼盼々、岸頭之者涙涓々。早知到没艱辛地、

水北邊。水裏之人眼盼々、岸頭之者涙涓々。早知到没艱辛地、

水北邊。水裏之人眼盼々、岸頭之者涙涓々。早知到没艱辛地、

悔不生時作福田。

悔不生時作福田。

悔不生時作福田。

### 【現代語訳】

奈河の水は西に激しく流れ、砕けた石が険しく連なって旅路もつらい。服を脱いで木の枝に掛け、追いつてられて一時たりとも立ち止まらせてはもらえぬ。河のほとりで点呼を取れば、我知らず涙で胸の衣を濡らさばかり。今日初めて我が身の死せしことを悟り、対になって木の傍らにいつまでも悲しみ泣く。生前にはわが家にて宝のことばかり考えて、四頭の馬に引かせて珠飾りある車輪の華やかな車に乗っていました。とこしなえに変わらぬものと思っておりましたが、あに凶らんや、はや塵となりはてようとは。ああ哀しいかな心は痛むも、むなしく白骨を埋めて高い塚とすること。南の厩の名馬には子や孫が乗り、北の窓辺の車は妻妾が用いましょう。異口同音にこう言うが仕方のないこと、ため息ついてこの上何をうらもうか。罪作りし

者は地獄に墮ち、善行なせし者は必ず天に生まる。今よりそれぞれ過去の行為に支配され、再会することは難しいに相違ない。手を握りこまやかにさようなら言い、頭をめぐらせ涙を拭ってじつくりと見る。耳に聞こえるは厳しい先払いの声、あまたの人々前へと向かう。牛頭は河の南岸にて棒を持ち、獄卒は河の北側にて刺股をかつぐ。水中の人は恋しげに見つめ、岸の者は涙もしとど。つとにかかるつらいところに来ると知っていれば、生前に福を積んでおいたものをと悔やまれる。

### 【注】

(一六) 讒巖…『水経注』(世界書局一九七四年) 卷三八「漆水」に「下有神廟、背阿面流。壇宇虚肅、廟渚攢石巖巖、亂峙中川(下に廟があり、岡を背にして流れに面している。廟には人気なく厳肅、廟の前の水際には石が集まり岩が連なって、河の中に入り乱れて聳えている)」とあるように、岩が険しく連なる様を「巖巖」という。「讒」は字形の類似から誤ったものであろう。

(一七) 行路澁…道を行くのが大変だという意味で、駱賓王「從軍中行路難」詩(『駱臨海集箋注』卷四)に「途危紫蓋峯、路澁青泥坂(道中危険なこと紫蓋峯の如く、歩むに難きこと青泥坂にまさる)」とあるように唐代にも用いられていた表現で特に問題はないが、P.3489(乙)は「人行路」、杏雨羽(1976)は「人行澁」とする。「人行路」は意味が通りにくく、韻も踏まないので誤りと思われる。「人」はしばしば読めない字の置き字として使用されるので、あるいは「澁」と「行路」の語順が顛倒したテキストがあり、そこで判読困難な「澁」のかわり

に「人」が置かれていたか。「人行澁」なら意味は通るが、「人」が *トホシ* (乙) と共通する点から考えて、同様の誤りのあるテキストに依拠するか。その場合、「澁」が他の二つと一致するのは韻に合う文字を求めた結果である可能性がある。中唐の張祜「途中逢李道實遊蔡州」詩(『全唐詩』卷五一〇)に「僻地人行澁、荒林虎跡稠(遠く外れた地は歩みも大変、荒れた林には虎の跡が一杯)」とあり、こうした表現を踏まえているのかもしれない。

(二八) 時向…「時餉」とも表記する。蔣禮鴻は、「時餉」「時向」は「一時一餉」の省略形である。……「一餉」は一度食事をする時間ということである」と説明する。

(二九) 問…『校注』は「聞」の誤りであろうとする。「他」に指示性が薄いと考えれば「問」のままでも理解は可能である。仮にその方向で誤す。

(一〇) 雙々…二人一組で対になること。「妙法蓮華經講經文」(P.2365)「雙々瑞鶴添香印、兩兩靈禽注水瓶(対になったためたい鶴が香を加え、二羽の霊鳥が瓶に水を注ぐ)」。などの例があり、唐詩にも李白「古風」第十八首の「七十紫鴛鴦、雙雙戲庭幽(七十の紫のおしどり、つがいで静かな庭で戯れる)」など例が多い。

(一一) 生時我舍事吾珍…杏雨羽 019V は「事」を「是」とする。この句の意味は取りがたい。「舍」を家と取れば、「生きていた時は家で宝のことばかり考えていた」となり、「舍」を「捨」と通用の動詞と考えれば、「生前何も考えずに宝ばかりを重んじた」となる。後者の用法がこの時期に存在したかは断定できないが、前者では「我舍」だけ

でそういう意味になりうるかに疑問がある。仮に前者で誤す。杏雨羽 019V は、意味が分からないので、音の近い「是」に改めて「生前は私の家が私の宝だった」としたのであろう。

(一二) 今軒…P.385(乙)に従って「金軒」とすべきだが、敦煌変文において「金」を「今」と表記する例は多く、誤りというよりは略字として用いられていると見るべきであろう。「金軒」は華やかに飾られた馬車のこと。晉の郭璞の「南郊賦」(『藝文類聚』(上海古籍出版社一九六五年)卷三八)に「升金軒撫太僕、揚六鸞齊八駟(華やかな飾りの車に乗って御者をねぎらい、六本の手綱をあげて八頭立ての馬を一気に走らせる)」と見える。

(一三) 珠倫…「倫」は「輪」の誤りであろう。各本同じであることから考えると、一般に用いられていた宛字である可能性がある。『校記』は高官の車を指す言葉ゆえ、より適切であるとして「朱輪」かとするが、「珠輪」も、唐代に唱われていた「水調歌 第三」(『樂府詩集』(中華書局一九七九年)卷七九)に「王孫別上緑珠輪、不羨名公樂此身(若緑の珠飾りの車に乗りたもうな、貴人を羨まずこの身を楽しもう)」とあり、改める必要はないものと思われる。

(一四) 為言…思う。事実には反する時に用いる。「以為」に同じ。「孟姜女變文」(P.5036)「為言墳隴有標題、壞々髑髏若箇是(墓には目印があるものとはかり思っていたのに、高く積まれた髑髏はこんな有様)」、「伍子胥變文」(S.326)「為言旬月即還、不知平王誅戮(じきに帰るものと思っていたのに、平王に殺されようとは)」などの例がある。

(一五) 干改…『校注』は「遷改」の誤りとする。この語は李白「對酒行」

〔季太白全集〕巻六)の「天地無彫換、容顔有遷改(天地は衰えることがないが、容貌は変わってしまう)」というように、悪い方向に変化する意味で用いられており、妥当かと思われるが、この表記は単なるミスではなく、前の「万古」と組にした言葉遊びとして意図的になされたものである可能性がある。

(二六)惟塵：『敦煌變文集』は「為塵」、項楚校は「微塵」とし『校注』は前者が妥当かとするが、『毛詩』小雅「無將大車」に「無將大車、維塵冥冥(大きな車のあがる塵で暗くしないください)」とあり、「惟(維)塵」で「塵」を二音節化した語として定型化していたものと思われる点からすると、改める必要はないかもしれない。

(二七)高塚：杜甫「曲江」二首之一(『杜詩詳注』巻六)に「江上小堂巢翡翠、苑邊高塚卧麒麟(川のほとりの小さな建物にカワセミは巢を作り、庭園のほとりの高い塚には石の麒麟がひっくり返っている)」とあるのが後世に至るまでよく知られており、ここもこの句を踏まえる可能性がある。

(二八)南槽龍：この句は六字のみで一字不足する。他本に従って「馬」を補うのが妥当と思われる。この句の最後の「乗」を杏雨羽019Vが「永」とするのは、字形の類似ゆえの誤りか。

(二九)妻接兩：このままでは意味が取れない。他本の「妻妾用」を字形の類似ゆえに誤ったものか。

(三〇)造罪諸人：P.3485(乙)・杏雨羽019Vに「造罪之人」とする。次句は「作善之者」であり、後に「水裏之人」「岸頭之者」が対になっていることから考えて、P.3485(乙)・杏雨羽019Vの方が適切か。

(三一)作善之者必人天：P.3485(乙)に従って「作善之者必生天」とすべきかと思われるが、杏雨羽019Vが「作善之必生」としてその後に一文字(「生」のように見える)消して「天」を続け、前の「必」の右上に「人」を書き込んでいるのは興味深い。おそらく基づいたテキストが「作善之必生人天」で、「人」を重字符号と見なして「作善之必生生天」としたが、誤りと気づいて「人」を前に移動させたのではないかと思われる。もしこの推定が正しければ、S.2614(原)と杏雨羽019Vは同じ文面のテキストをもとにし、前者は「者」を補った可能性が出てくる。

(三二)後迴：このままでは意味を取りがたい。他本に従って「後會」とすべきか。「伍子胥變文」(S.328)「相看情未足、豈忍別生分。後會如(知?)何日、離心若至親(いくら見つけても情は満足を知らぬ、生きながら別離するに忍ぼうか。再会はいつの日か、別れる時の思いは親しい身内に同じ)」などの例がある。

(三三)握手丁寧努力：「努力」は古く「古詩十九首」の「行行重行行」に「棄捐勿復道、努力加餐飯(捨て去ってもう何もおっしゃいますな、しっかり食事をしてください)」とあるように、別れの時の言葉として用いられる。敦煌變文でも「伍子胥變文」(S.328)に「儻若不弃是卑微、願君努力當食飯(もし卑賤の身をお見捨てないのなら、頑張つて食事をしてください)」とほぼ同じ表現が見られる(ただしここでは本当に食事を勧めているのだが、別れの定型の応用と見るべきであろう)。杏雨羽019Vが「握手」を「屈手」とするのは字形の類似に由来する誤りか。

〔三三〕迴頭拭淚：「迴頭」をP.3485(乙)が「迴須」とするのは字形の類似による誤りであろう。「拭淚」をP.3485(乙)・杏雨羽019Vが「識淚」とするのは音が近いことによる誤りか。

〔三五〕唱道：『太平廣記』卷九〇「異僧四」杯渡に「須臾見一寺甚光麗、多是七寶莊嚴。又見十餘石人乃共禮拜。還反行、少許聞唱道聲、還往更看、猶是石人（間もなく七宝で莊嚴されたとてもきれいな寺が見えてきた。更に十餘の石人が一緒に礼拝していた。逆戻りすると、「唱道」の声が聞こえたので、またまた行つて見ると、やはり石人であった）」とあり、ここでの例と合わせて考えると、後世の「喝道」に当たる先払いの声かと思われる。

〔三六〕没：このように。宋代以降は「麼」と表記される。陸龜蒙「和重題薔薇」詩に（『陸龜蒙全集校注』〔鳳凰出版社二〇一五年〕『唐甫里先生文集』卷一一）「更被夜來風雨惡、滿塔狼藉没多紅（昨夜からの風雨の猛々しさのせいで、階一杯にかくも多くの紅が散らばっている）」とある。

（小松）

8

《唱》

S.2614(原)：目連問言奈河樹下人曰、「天堂地獄乃非虛。行惡不  
P.2319(甲)：目連問言奈河樹下人曰、「天堂地獄乃非虛。行惡不  
P.3485(乙)：目連問言奈河樹下人曰、「天堂地獄乃非虛。行惡不

論天所造罪、應時冥零亦共誅。貧道慈親不積善、亡魂亦復落三  
論天所×罰、××××××× 貧道慈親不積善、亡魂亦復落三  
論天所×罰、應是冥遷亦共誅。貧道慈親不積善、亡魂亦復落三

塗。聞道將來入地獄、但曰知其消息否。」罪人惣見目連師、一切  
塗。聞道將來入地獄、但曰知其消息否。」罪人惣見目連師、一切  
塗。聞道將來入地獄、但曰知其消息否。」罪人惣見目連師、一切

啼哭損雙眉、<sup>(5)</sup>「弟子死來年月近、和尚慈親實不知。我等生時多造  
啼哭損雙眉、「弟子死來年月近、和尚慈親實不知。我等<sup>生</sup>來多造  
哭啼損雙眉、「弟子死來年月近、和尚慈親實不知。我等生時多造

罪、今日辛苦方始悔。縱令妻妾滿山川、誰肯死來相替代。何時  
罪、今日辛苦方始悔。縱令妻妾滿山川、誰肯死來相替代。何時  
罪、今日辛苦方始悔。縱令妻妾滿山川、誰肯死來相替代。何時

更得別泉門、為報家中我子孫。不湏白玉為棺槨、徒勞黃金葬墓  
更得別泉門、為報家中我子孫。不湏白玉為棺槨、徒勞黃金葬墓  
更得別泉門、為報家中我子孫。不湏白玉為棺槨、徒勞黃金葬墓  
更得別泉門、為報家中我孫子。不湏白玉為棺槨、徒勞黃金葬墓

墳。長悲怨歎終無益、鼓樂弦歌我不聞。欲得亡人没苦難、無過  
墳。長悲怨歎終無益、鼓樂弦歌我不聞。欲得亡人没苦難、無過  
墳。長悲怨歎終無益、鼓樂弦歌我不聞。欲得亡人没苦難、無過  
墳。長悲怨歎終無益、鼓樂弦歌我不聞。欲得亡人没苦難、無過

修福救冥魂。

修福救冥魂。

修福救冥魂。

### 【現代語訳】

目連は奈河の木の下の人に尋ねて申します。「天国と地獄は、なんと偽りではなかったのですね。悪行を為せば天が断罪するまでもなく、すぐに冥土でも誅殺されるのですね。私の親は善を積まなかったので死後の魂もまた三途の川に落ちてしまいました。聞いた話では、こちらにやって来て地獄に入るだろうということですが、その消息だけでもご存じありませんか。」罪人はいずれも目連を見て、みな眉をひそめて大声で泣き悲しみました。「私は死んでから日が浅く、お坊様のお母様のことは本当に存じ上げないのです。私たちは生きていた時分に多くの罪を作り、今苦しみを味わって初めて後悔しています。たとえ妻や妾が山川に満ちていても、誰が死んで身代わりになってくれると言うでしょう。この上いつ黄泉の門に別れを告げられましょうか、家中の我が子孫にお知らせください。白玉をひつぎにしても意味はない。黄金を墓に葬っても無駄なこと。とこしえに悲しみ嘆こうと結局無益、音楽や歌は私には聞こえない。死者に苦難のないようにしたければ、功德を積み死者の魂を救う以上のことはない、と。

### 【注】

(一) 所造罪：P.2319(甲)・P.3485(乙)は「所罰」とする。S.2614(原)は「所

造」の後ろに薄く「罪」の字があるように見えるが、それでは八字句になってしまっているので、P.2319(甲)・P.3485(乙)に従って訳す。

(二) 應時冥零亦共誅：P.2319(甲)にはこの句がない。P.3485(乙)は「應時(すぐに)」を「應是(すべて)」としており、蔣禮鴻は「應是」と「應時」は通用するとする。どちらでも意味は通るが、ここでは原文を尊重して仮に「すぐに」と訳す。「冥零」をP.338(乙)は「冥遷」とする。「校注」が言うように「冥靈」に同じか。「零」と「靈」は「廣韻」ではともに平聲下十五青の「郎定切」である。「冥靈」は、「伍子胥變文」(S.328)に「語已含啼而啓告、冥靈幸願知懷抱(泣きながら申し上げます、死者の霊よどうか思いを知ってください)」とあり、ここでは入水して死んだ女の霊のことを指していることから、死者の霊を指すと思われる。

(三) 聞道將來入地獄：「將來入」の用例としては、『法苑珠林』卷三四「攝念篇 引證部」「昔有人不信敬。婦甚事佛。婦白婿曰。人命無常可修福德。婿無心懶墮。婦恐將來入地獄中(昔、信心深くない人がいた。妻はとても熱心に仏を信じていた。妻は夫に言った。「人の命は無常ですが福德を積むことができます。あなたは信心がなくなったらしない生活をしています。私は将来地獄に入ることを恐れています。）」があるが、ここでは「將來」という方向では取りにくい。「金剛醜女因縁」(S.214)に「便遣送在深宮、更莫將來休交朕見(すぐに宮中深くに送って、この上連れてきてわしに見せるでない)」とあるような「連れてくる」という方向と取って、「こちらに来て入るだろう」という意味に解釈する。

(四) 損雙眉：後世の用例であるが、明の朱鼎の南戲『玉鏡臺記』（古本戯曲叢刊二集所収明汲古閣刊本）第一八齣【傍粧臺】に「彩雲天遠鳳樓空。幾多幽怨、堆積在心胸。愁覺損雙眉黛、淚濕透兩綉紅（彩雲は天に遠く鳳樓の空、幾多の怨みが胸に積もる。憂いに双眉をひそめ、涙は両頬をぬらす）」とあり、眉をひそめて悲しんだり困ったりすることを指すと思われる。

(五) 滿山川：似た用例として、呂洞賓（呂巖）の詩とされる「敲爻歌」（『全唐詩』卷八五九）に「堆金積玉滿山川、神仙冷咲應不彩（金玉を積んで山川に満ちても、神仙は冷笑して相手にせぬはず）」がある。

(六) 徒勞：P.3485(乙)は「勞」を「浪」と表記する。「徒浪」の用例は他の敦煌文献にも見られ、唐の劉長卿の作とされる「酒賦」（P.2633ほか）もしくは「高興歌」（P.2655ほか。『敦煌賦校注』は「酒賦」として収録する）に「胡（壺）觴百杯徒浪飲、章程未許李稍雲（百杯の酒を飲んでも無駄なこと、李稍雲の決まりなど認めはしない）」とある。「浪飲（無茶な飲み方をする）」を「徒」が修飾しているとも取れるが、P.3485(乙)が「徒勞」を「徒浪」としていることからすると、劉長卿の例も「徒浪」で一語かと思われる。

#### 《散文》

S.2614(原)：和尚却歸、×××為傳消息、交令造福、以救亡人。除仏  
P.2319(甲)：和尚却×、与諸人為傳消息、交令造福、以救亡人。除仏  
P.3485(乙)：和尚却× ×××為傳消息、交令造福、以救亡人。除仏

一人、無由救得、願和尚捕提涅槃、尋常不沒。運載一切衆生、智惠銀  
一人、無由救得、願和尚捕提涅槃、尋常不沒。運載一切衆生、智惠銀  
一人、無由救得、願和※ P.3485(乙)は「願和」。

勤磨、不煩惱林而誅（一〇）威、行善心於世界、而諸仏之大願。儻若出離泥

勤磨、不煩惱林而誅滅、行善心於世界、而諸仏之大願。儻若出離泥利

（一三）犁、是和尚慈親普降。（一四）

犁、是和尚慈親普降。

#### 【現代語訳】

お坊様はお戻りになって消息をお伝えになり、功德を積ませ、亡者をお救いください。仏様お一方以外には救うよしもなく、願わくはお坊様の悟りの常に失われることのあるありませぬよう。一切衆生を導き、知恵剣をつつしんで磨き、煩惱の林を切り払い、広い心を世界に広めること、それが諸仏の大いなる願いです。もし地獄を出ることができたら、それはお坊様の御慈悲のおかげです。」

#### 【注】

(七) 和尚却歸為傳消息：S.2614(原)は「和尚却歸、為傳消息（お坊様

はお戻りになって消息をお伝えください」と、P2319(甲)は「和尚却  
与諸人為傳消息(お坊様はひとまず人々に消息をお伝えください)」、  
P3485(乙)は「和尚却為傳消息(お坊様はひとまず消息をお伝えくだ  
さい)」となりいずれも少しずつ異なる。訳はS2614(原)に従っておく。

(八)運載一切衆生：『大方廣佛華嚴經』卷一六「金剛幢菩薩十迴向品」  
第二十一之三に「令一切衆生、成最高廣安隱大乘、悉能運載一切衆生、  
至無上道(一切衆生に最も高く広く、安隱な大乘を成さしめれば、悉  
く一切衆生を導き、最上の悟りの境地に至ることができるとある  
ように、生きとし生けるものを導くこと)。

(九)智慧劍：「劍」は「劍」の異体字。「般若の智慧を劍にたとえる」(『広  
説』)。また般若は「悟りを得る真実の智慧」(『広説』)。これで後述の  
煩惱を切り払う。

(一〇)不煩惱林而誅威：「不」は誤りと思われる。また「威」はP2319  
(甲)では「滅」にも見え、おそらく「誅滅」が正しいのではないかと  
思われる。智恵(慧)劍によって煩惱を滅する用例は、『大方廣佛華嚴經』  
卷四三「離世間品」三十三之七「清淨心爲楯、明利智慧劍、摧滅諸煩  
惱、外道眾魔怨(清淨な心を楯とし、輝く鋭い智慧の劍にて、諸々の  
煩惱を破壊し滅ぼせば、外道衆魔は怨む)」がある。「煩惱林」は「煩  
悩の数が多きことを林にたとえる」(『広説』)。

(一一)行普心於世界：「普心」は差別をしない広い心のこと。『大方廣  
佛華嚴經』卷三〇「十迴向品」二十五之八に「願一切衆生、得周普心、  
平等智慧(どうか一切衆生にあまねく広い心と平等の智慧を得させて  
ください)」とある。

(一二)而諸仏之大願：『大方廣佛華嚴經』卷四九「入法界品」第  
三十四之六に「欲滿一切諸佛大願、欲淨一切諸佛色身(すべての諸仏  
の大願を満たそうとし、すべての諸仏の肉体を浄めようとし)」と見  
える。この句は動詞を欠く。普通であれば「而」の位置に「滿」が来  
るべきところであるが、とりあえず「それが諸仏の大願である」とい  
う方向で訳しておく。

(一三)泥犁：「nirayaのnayaがeとなったものの音写か。地獄のこと」  
(『広説』)。『佛說泥犁經』に、「今我行惡、死當入泥犁(今私が悪い行  
いをすれば死んで地獄に墮ちることになる)」と見える。「泥犁」「泥黎」  
とも表記する。P2319(甲)は「利」を二重線で消し、右横に誤字を示  
す記号「ト」を記した上で「犁」に改めている。

(一四)是和尚慈親普降：「慈親」は「慈悲」や「慈心」の誤りではな  
いかと思われるが、この箇所はP2319(乙)も欠けており、判断しに  
くい。あるいは目連を父母のように慈悲深いものとしてこのように呼  
ぶか。「普降」は『大方廣佛華嚴經』卷四三「離世間品」三十三之八「菩  
薩大龍王、具足自在力、普降甘露法、澤潤諸群生(菩薩大龍王は自在  
力を持ち、甘露を普く降らせて諸々の生命を潤す)」のようにあまね  
く降らすことか。

(田村)



「大目乾連冥間救母變文」 訳注 (一) セクション1～8 担当者

- ① 井口 千雪
- ② 大賀 晶子
- ③ 小松 謙
- ④ 田村 彩子
- ⑤ 井口 千雪
- ⑥ 大賀 晶子
- ⑦ 小松 謙
- ⑧ 田村 彩子

(二〇一八年十月一日受理)

- (こまつ けん 京都府立大学文学部教授)  
(いのくち ちゆき 九州大学人文科学研究院講師)  
(おおが あきこ 京都大学国際高等教育院非常勤講師)  
(かつき れいこ 京都府立大学大学院博士前期課程)  
(かわかみ めぐみ 京都府立大学大学院学術研究員)  
(そん りんじょう 京都府立大学大学院博士後期課程)  
(たまき なおこ 京都府立大学大学院学術研究員)  
(たむら さいこ 立命館大学言語教育センター嘱託講師)  
(ふじた ゆうこ 京都府立大学非常勤講師)  
(みやもと はるか 京都府立大学大学院博士後期課程)

本訳注は小松が交付を受けている平成三十年度科学研究費助成事業・基盤研究C・課題番号一六K〇二五九二「『水滸伝』本文の研究」、井口が交付を受けている平成三十年度科学研究費助成事業・若手研究・課題番号一八K一二三二〇「明代武官を中心とした社会的異種階層間の文学的交流の研究」、川上が交付を受けている平成三十年度植田安也子学術振興基金大学院生等研究奨励事業・題目「『懐風藻』の構成と人物伝に関する考察」および宮本が交付を受けている平成三十年度科学研究費助成事業・特別研究員奨励費・課題番号一七J〇四六九七「唐話の流行から見る漢籍受容―岡白駒とその周辺」の成果の一部である。

